

民間信仰遺跡分布調査報告書

－近世の経塚－

2001. 3

山梨県教育委員会

民間信仰遺跡分布調査報告書 正誤表

頁	行	誤	正
12	3	經碑 [天明4年] (1784年)	經碑 [天保4年] (1833年)
16	9	55. 妙了解寺經碑	55. 妙了寺經碑
21	37	公宣流布	廣宣流布
22	1	享保20年 (1935)	享保20年 (1735)
32	41	原門經塚	原間經塚

民間信仰遺跡分布調査報告書

－近世の経塚－

2001. 3

山梨県教育委員会

富沢町 正行寺 一石経（多字一石経）

塩山市 惠林寺 錦樓出土の一石経（多字一石経）

(A)

(B)

南部町 原間経塚



(1) 経碑



(2) 石室上部出土状况



(3) 石室内経石の半截状況



(4) 石室の完掘

序

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成10年度（1998）から3ヵ年をかけて実施した民間信仰遺跡の分布調査の報告書であります。

民間信仰は、その大部分が石造物などを残しておりますが、それらの所在する場所を遺跡としてとらえることができます。本書ではこれらの民間信仰遺跡のうち、地中に一石経を埋納した「近世の経塚」を対象として、60数ヵ所の分布調査の結果を報告しております。地中に經典を納めるという点において、古代の経塚、中世の経塚、近世の経塚との間に関連性を認めることができます。近世の経塚は、江戸期には一石経を埋納して経碑を立てることが一般的であり、広く民間に普及した信仰形態であったことが知られます。今日、これらの遺跡は石造物の撤去やその場所の消滅が進んでおり、貴重な近世の文化財が失われつつあります。本書の成果がこれらの民間信仰遺跡の保護ならびに近世考古学の進展に結びつくことになれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関並びに調査、整理作業に従事された方々にお礼を申し上げる次第であります。

2001年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚 初重

例　　言

1. 本書は平成10年度（1998）から3カ年事業として、文化庁の補助金を受け山梨県教育委員会が実施した民間信仰遺跡の分布調査事業の報告書である。
2. 調査は、山梨県教育委員会が文化庁の補助金を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。調査期間は平成10年度（1998）、11年度（1999）、12年度（2000）である。
3. 本書の執筆、編集は田代孝が行った。
4. 遺物の実測、トレースは船場昌子、三枝千穂美が行った。口絵写真は塙原明生氏（日本写真家協会会員）の協力を得た。
5. 本報告書にかかる記録、図面、写真は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1. 遺構、遺物の図面の縮尺は次のとおりである。
原間経塚 1/40 下三吹経塚 1/80
縮尺のない一石経 1/2 錢貨 1/2
2. 遺跡一覧表の位置図は 1/25,000 である。

目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査の目的	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査組織	1

第Ⅱ章 近世経塚の遺跡分布

第1節 遺跡分布	2
第2節 経塚遺跡一覧	3~17
第3節 分布調査の概要	18

第Ⅲ章 原間経塚の発掘調査

第1節 発掘調査の概要	19
第2節 発掘された遺構と遺物	20
第3節 まとめ	21~25

第Ⅳ章 近世の経塚

第1節 山梨の経塚研究史	26~27
第2節 山梨の経塚	28~32
第3節 一石經の経塚	32~35

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査の目的

埋蔵文化財発掘調査件数は近年増加の一途をたどってきた。その要因は全国各地に展開した各種の土木工事を中心とした開発事業である。遺跡は土地に深く結びついたものである以上、土地改変によってそこに埋もれた人間活動の跡も大部分が失われ、遺跡としての価値を消滅してしまうことは確かなことである。しかし、発掘調査された遺跡は、調査報告書が刊行され学術資料となり、また発見された遺物は保存され、考古資料として活用されているところである。

現在、遺跡は時代をより古くさかのばらせつつあると同時に、新しい時代をも視野に入れて扱っているが、さらに、空間的に広がりをもつようになってきていることから遺跡の数は減ることなく増えているといえよう。

このような遺跡への認識に基づき從来主に民俗学から取り組まれてきた石造物も、考古学の対象として扱うことは意義のあることと思われる。各種の石仏、供養碑等の石造物の多くが近世の所産となっているが、地域における伝統的な信仰形態の遺産である性質上、今日の地域社会の変化に伴い、急激に失われ忘れられつつある存在となっている。なかでも近世の經塚としての「一石經の經塚」は、江戸期に民間に広く普及した信仰と思われるものであり、県下にも多く存在する文化財であるといえよう。

一石經の經塚は埋納された一石經とその記念碑である經碑がセットになる関係にあるといえるが、しばしば地域の開発に伴う移転などに際して、下部の一石經は考慮されず、經碑のみが対象になり移されることが多い。これらの一石經の經塚を埋蔵文化財として把握し、その保護を図るためにそれらの所在を明らかにすることは急ぐべきことである。このことから県下全域の分布調査を行うものである。

第2節 調査方法

調査は①「郡誌」・「市誌」・「町誌」・「村誌」や「石造物の調査報告書」等の文献類に記録された近世の經塚に関する調査、②地名、絵図、古記録、伝承等の調査、③上記の①、②に基づく所在確認調査、④発掘調査事例の確認調査、⑤県内踏査による分布調査を実施した。

分布調査に伴う発掘調査は、南巨摩郡南部町に所在する原間經塚を行った。小石室を築いて一石經を納め、その上部に經碑を置いたものであり、近世の經塚の典型となる事例となった。なお、一石經は64,000点余を取りあげ整理したところ、書写されたものは法華經であることが知られた。なお、調査の中で知られた高源寺經塚（甲府市）、葛谷峠經塚（南部町）、恵林寺經塚（塩山市）、正行寺一石經（富沢町）、富士山北口一合目經塚（富士吉田市）の出土一石經の調査を行った。

第3節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者

平成10年度 田代 孝（山梨県埋蔵文化財センター・埋蔵文化財指導幹）

保坂一英（山梨県埋蔵文化財センター・主査 文化財主事）

清水裕司（山梨県埋蔵文化財センター・主任 文化財主事）

平成11年度 田代 孝（山梨県埋蔵文化財センター・次長）

三森鉄治（山梨県埋蔵文化財センター・主査 文化財主事）

平成12年度 田代 孝（山梨県埋蔵文化財センター・次長）

三森鉄治（山梨県埋蔵文化財センター・主査 文化財主事）

作業員・整理員 三枝千穂美、樋口知子、船場昌子、田中朋子

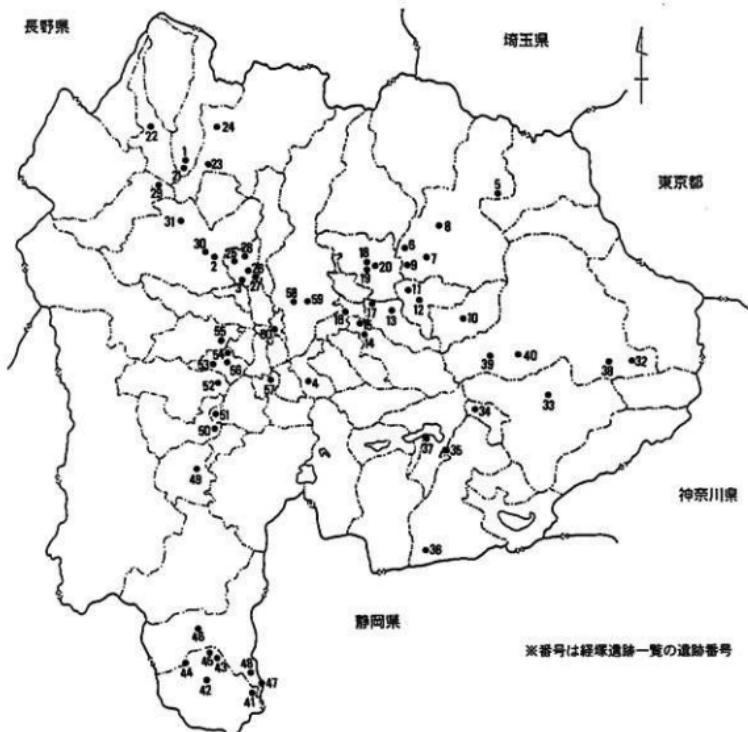
協力者・機関 原間和彦、渡辺淳郎、野沢公次郎、富士吉田市教育委員会、南部町教育委員会、富沢町誌編さん室、高源寺、正行寺、瑞蓮寺、法泉寺、恵林寺

第Ⅱ章 近世経塚の遺跡分布

第1節 遺跡の分布

中世の経塚は、これまでに韭崎市、双葉町、高根町の北巨摩郡下に集中して確認されている。経塚としての造構は円形の小丘状を呈するものであったと思われるが、双葉町の例のみがやや形態を残存している。他の例は開墾などによって削平されている。なお、埋納されていた小形の経筒、銭貨の一部などについては保管されている。また、中道町の例は経筒、泥塔が伝世されたものであるが、本来近くの山上にあった六角堂に奉納されたものと考えられる。

近世の経塚は、県内の各市町村に分布することが予測されたが、全域を網羅するにはいたらなかったが、引き続き集成すべきことを課題とし、現在確認できたものを示している。



経塚遺跡分布図

第2節 経塚遺跡一覧

1. 上藏原経塚

北巨摩郡高根町上藏原

銅製経筒〔天文21年銘〕(1552年)

銭貨12点

現状が山林、土盛りによる円形の小丘は削平され消滅

「山梨県北巨摩郡高根村出土の葡萄唐草文のある経筒について」県立富士国立公園博物館研究報告三 1960年



2. 上条東割経塚（大六塚）

韮崎市大草町上条東割

銅製経筒〔永正18年銘〕(1511年)

現状は宅地、削平され消滅

「経筒沿革考」考古界6-8 1907年



3. 塔之越経塚

北巨摩郡双葉町下今井

銅製経筒〔永禄4年銘〕(1561年)

銭貨138点

現状は山林、直径3m・高さ約1.5mの小丘あり、上部に20~30cmの石が蓋かれている。

「甲斐国北巨摩郡双葉町塔の越出土の経筒」甲斐考古1966年



4. 円楽寺経筒

東八代郡中道町右左口

銅製経筒〔元亀2年銘〕(1571年)

泥塔一基

経筒は伝世品、南西の尾根上の六角堂内に奉納されたものか。

「七覚山円楽寺の経筒と廻國納経」山梨考古学論集Ⅰ 1986年



5. 寺屋敷経塚

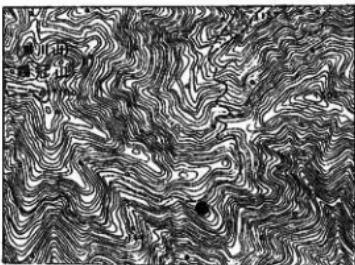
塩山市一之瀬・高橋

礫石経（一石経）、刀身2

年不詳

標高約1,400mの尾根上、経塚の形状は1辺が約3mの
隅丸方形で高さは約70cm、上部は20cmほどの石で覆わ
れている。

「甲斐黒川金山」黒川金山遺跡研究会・塩山市教育委員
会 1997年



6. 恵林寺経塚

塩山市小屋敷2280

一石経49点 年不詳

平成12年鐘楼改築に伴い墓壇より出土、鐘楼墨書紀年銘
に安政3年（1856）とある。



7. 千野経塚

塩山市千野3687

経碑〔宝暦8年〕（1758年）

一石経

道路拡幅により、経碑・一石経は旧常光院境内地に移転

「山梨の経塚」山梨県考古学協会誌創刊号 1987年

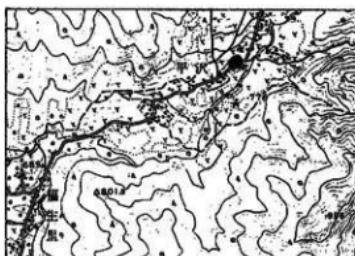


8. 平沢経碑

塩山市平沢清水666

経碑〔享和3年〕（1803年）

「塩山市の石造美術」塩山市教育委員会 1983年



9. 上塩後経碑

塩山市上塩後823

経碑 年不詳

共同墓地の中央に位置する。



10. 景徳院経碑

東山梨郡大和村田野389

経碑 年不詳

景德院境内地の北で、曲沢峠入口



11. 大塚經塚

東山梨郡勝沼町山

経碑 [延享2年] (1745年)

一石経

宅地内・横穴式古墳を利用

「勝沼町誌」「辻家記録」に記述あり

「山梨の経塚」1987年



12. 泉勝院経碑

東山梨郡勝沼町勝沼

経碑 [延享元年] (1744年)

「勝沼町史」「勝沼古事記」に記述あり

「山梨の経塚」1987年



13. 中尾經碑

東八代郡一宮町中尾

經碑 年不詳

果樹園内にあり、經碑には「經墳供養塔」とある。

「近世における一石經の遺跡」山梨考古学論集Ⅲ 1994年



14. 夏目原經塚

東八代郡御坂町夏目原

經碑〔宝曆8年〕(1758年)

一石經

宅地内にあり、5m程經碑・一石經を移転する。

「山梨の近世經塚」甲斐の成立と地方的展開 1989年



15. 成田經碑

東八代郡御坂町成田732-1

經碑〔寛政5年〕(1793年)

九品寺の東方にあり、道路拡幅の際向きを変更、經碑下部に一石經ありといふ。



16. 遠妙寺一石經

東八代郡石和町市部

年不詳

一石經「南」「無」「妙」「法」「連」「華」「經」の7点あり。

「山梨の經塚」1987年



17. 瑞蓮寺經塚

東八代郡一宮町南田中

經碑〔天明1年〕(1781年)

一石經「南無阿彌陀佛」等。

瑞蓮寺境内、山門脇の塚上部の經碑移転時に一石經出土。



18. 市川經碑

山梨市市川

經碑〔天明3年〕(1552年)

醒醐院(廢寺)墓地跡



19. 大工經碑

山梨市大工

經碑〔文久2年〕(1862年)



20. 神明前經石

山梨市市川735

年不詳

經石「諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為樂」7点

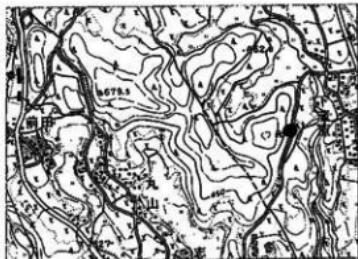


21. 鐘堂經碑

北巨摩郡高根町下藏原

經碑〔文化10年〕(1813年)

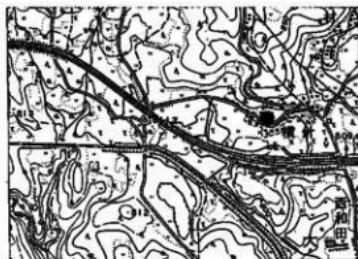
鐘堂境内



22. 橫針經碑

北巨摩郡長坂町橫針

經碑〔明治2年〕(1869年)



23. 小倉經碑

北巨摩郡須玉町小倉

經碑年不詳



24. 上津金經碑

北巨摩郡須玉町上津金

經碑〔天明7年〕(1787年)

共同墓地内



25. 米沢経碑

北巨摩郡双葉町宇津谷米沢3771

経碑〔天保13年〕(1842年)

米沢地区の南端で旧道沿い

「山梨の経塚」1987年



26. 龍泉院経碑

北巨摩郡双葉町竜地大滝6636

経碑 年不詳

龍泉院門前



27. 黄梅院経碑

北巨摩郡双葉町竜地大滝6288

経碑〔寛保4年〕(1744年)

黄梅院（庵寺）墓地



28. 法泉寺経碑

北巨摩郡双葉町菖蒲沢日向1182

経碑〔嘉永3年〕(1850年)

法泉寺境内



29. 下三吹経塚

北巨摩郡武川村下三吹

経碑〔寛政3年〕(1791年)

一石経

柱状の石材を組んで石室を設けている。

「武川村誌」1986年



30. 上条北割経塚

韮崎市旭町上条北割

経碑〔嘉永7～安政6年〕(1854～1859年)

一石経(大輪寺藏)

釜無川右岸の段丘崖線の肩部を走る県道北原・下条南割
線沿い。

「山梨の近世経塚」甲斐の成立と地方的展開 1989年



31. 重久経塚

韮崎市穴山村重久

経碑〔寛保4年〕(1744年)

一石経

「山梨の経塚」1987年



32. 新倉経碑

大月市梁川町新倉

経碑〔享保15年〕(1730年)

桂川左岸の段丘斜面

「大月市の石造物」大月市教育委員会 1993年



33. 東陽院経碑

都留市禾生

経碑 年不詳

東陽院境内で国道139号に面している。

「都留市の石造物」都留市教育委員会 1983年



34. 三ッ峰

南都留郡西桂町下暮地

経碑 [天保6年] (1835年)

三ッ峰登山道沿い

「西桂町の石造物」西桂町教育委員会 1981年



35. 松山経碑

南都留郡河口湖町

経碑 [天明8年] (1788年)

河口湖町と富士吉田市の境にあたり、国道137号線に面している。



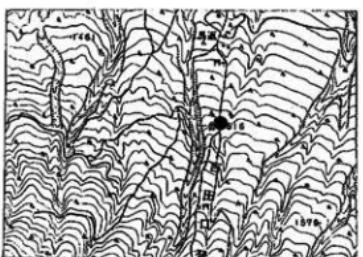
36. 富士山吉田口一合目経塚

富士吉田市上吉田

年不詳

一石経

富士山吉田口一合目にあり、「歴史の道」整備事業に伴う発掘調査にて発見。一石経の一部約1,300点を取りあげる。



37. 妙法寺經碑

南都留郡河口湖町小立

経碑〔天明4年〕(1784年)

妙法寺山門前



38. 近久保經塚

大月市猿橋町藤崎字近久保

年不詳

一石經

桂川右岸の段丘上に延びた小尾根に位置し、東西8m、南北7.5mの不整円形の小丘で高さ2m。

「近久保經塚」大月市教育委員会 1990年



39. 吉久保經碑

大月市笛子町吉久保

経碑 年不詳



40. 保雲寺經塚

大月市初狩町下初狩

年不詳

一石經

本堂の収蔵庫の下より一石經が出土している。

「近世における一石經の遺跡」山梨県考古学論集Ⅲ 1994年



41. 本光寺経碑

南巨摩郡富沢町万沢3518

経碑〔元暦12年〕(1762年)

本光寺境内

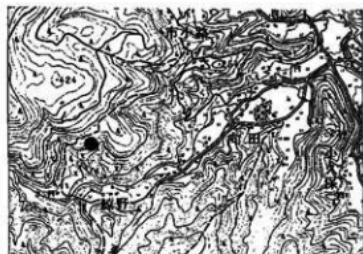


42. 玉泉寺経碑

南巨摩郡富沢町福土13244

経碑〔享保10年〕(1725年)

玉泉寺(廢寺)へ通ずる参道に面し、現在は山林となる。



43. 真種経碑

南巨摩郡富沢町福土

経碑〔明和8年〕(1771年)

栄樹庵墓地内



44. 藤井山経塚

南巨摩郡南部町・富沢町境界

経碑〔元禄7年〕(1694年)

藤井山山頂(1394m)付近の平坦地。山頂の四ノ位明神3社のうち、中央の社の下から「藤原頸長」銘の壺が発見されている。「古代の経塚」として紹介されている。

「山梨の経塚」1987年



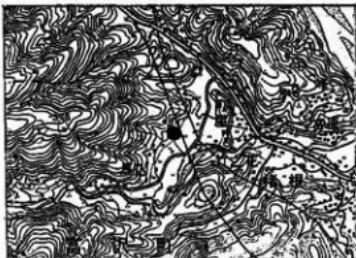
45. 正行寺經碑

南巨摩郡富沢町猪根371

經碑〔文政13年〕(1830年)

正行寺本堂須弥壇下一石經約400点

〔天保10年〕(1839年)



46. 原間經塚

南巨摩郡南部町本郷

經碑〔享保20年〕(1735年)

一石經 64,318点

「南部町誌」1999年



47. 葛谷峠經塚

南巨摩郡南部町十島

經碑〔文政12年〕(1829年)

一石經 約50,000点

「南部町誌」1999年



48. 十島經碑

南巨摩郡南部町十島

經碑〔享保15年〕(1730年)



49. 切石經碑

南巨摩郡中富町切石下宿

經碑〔文化9年〕(1812年)

富士川橋の西側で、国道52号線に面する。



50. 天神ヶ滝經塚

南巨摩郡鍛沢町箱原

經碑〔嘉永元年〕(1848年)

一石經

富士川右岸の段丘上に位置する。

「河内路・西郡路」山梨県歴史の道調査報告書第七集
1986年



51. 法師倉經碑

西八代郡市川大門町法師倉

經碑〔寛政11年〕(1799年)

相延寺前



52. 法界寺經塚

南巨摩郡増穂町天神中条

年不詳

法界寺境内



53. 経石寺経碑

中巨摩郡甲西町西落合864

経碑

経石寺境内



54. 隆昌院経碑

中巨摩郡甲西町江原1550

経碑〔弘化3年〕(1846年)

隆昌院境内



55. 妙了解寺経碑

中巨摩郡檍形町上市之瀬724

経碑〔文化12年〕(1815年)

妙了寺門前



56. 古長禪寺経碑

中巨摩郡甲西町鮎沢

経碑〔宝曆11年〕(1761年)

〔文化6年〕(1809年)

〔天保8年〕(1837年)

〔嘉永元年〕(1848年)

旧釈迦堂境内

「近世の経塚について—山梨の一石経塚を中心として—」

考古学雑誌74-4 1989年



57. 大塚經碑

西八代郡三珠町大塚

經碑〔寛政10年〕(1798年)



58. 高源寺經碑

甲府市高畑

經碑〔宝曆7年〕(1757年)

一石經

高源寺境内

「近世における一石經の遺跡」山梨考古学論集Ⅲ 1994年



59. 信立寺經碑

甲府市若松町

經碑〔享保16年〕(1731年)

信立寺門前

「甲府の石造物」甲府市史編纂委員会 1993年



60. 仏乗寺經碑

中巨摩郡昭和町河東中島

經碑〔享保19年〕(1734年)

仏乗寺門前

「河内路・西郡路」山梨県歴史の道調査報告書第七集
1986年



第3節 分布調査の概要

中世の経塚遺跡として確認できたのは3カ所および関連遺跡1カ所である。これらの遺跡は明治中期頃に発見されており、これまでに開墾などによって偶然に発見された場合が多く、現在ではその場所の特定が困難となっていた。今回これらの現状把握を行い、あわせて出土遺物の確認も行うことができた。なお、中世の経塚は書写した經典を小形の經筒に納めて、土盛りした中に埋納したものであり、16世紀代に盛行した信仰形態である。これらの信仰を支えた階層は戦国期の地域土豪層や都市部の富裕層などが考えられるところである。このことから県内においても北巨摩郡に限らず、広範にその事例を探ることが今後も期待されるところと思われる。

法華經を書写して土中に埋納するということにおいて、中世の経塚と近世の一石經の経塚との間に関連性を認めることができる。今回の調査では近世の経塚として60カ所に近いものを確認することができたが、それらの所在地を見ると近世集落内、集落境、寺院境内、墓地、街道沿い、山頂、屋敷地内などさまざまであった。

たとえば、災害により犠牲者が出了る場合に、その近くに供養のため營まれたと思われる事例などは、一石經の書写を行う目的が明確であり、それらを埋納し、經碑を建てるにふさわしい場所であることは確かなことであろう。とかく、近世の経塚に関する記録は少ないので、その場所から経塚造営の目的などを探る手がかりも得られやすい。その立地など十分検討することは重要である。

近世の経塚は、記念碑として經碑の存在などからその分布を確認できるものであるが、經碑とその下部の一石經が一体となっているとは限らない。分布調査によって知られた中には、經碑をはじめ必要としなかったと思われるものがある。なお、經碑の多くはその下部を確認することはできなかったが、すで探集されていたものなどを記録することができたものもある。經碑そのものが元の場所から移されているものもある。

今回の分布調査は、悉皆的なものにはなっていないが、いくつかの傾向を知ることができたように思われる。近世の一石經の経塚は、仏教との関係では日蓮宗、曹洞宗、臨済宗の寺院との結びつきが深いこと、宗派によって一石經の扱いが異なることがうかがわれること、経塚造営に当たって集団での取り組みが行われたもの、やや個人的立場で行っているものがあることなどである。さらに、発掘調査によって一石經経塚の造営の具体的な方が明らかになることによって、近世における民間信仰の一形態の様相を探ることができることなどである。今後、分布調査の蓄積を行いつつ、発掘調査などの成果をも加え、近世経塚の実体を明らかにし、一石經の経塚を文化財としてなお一層その保護を図るべきものと思われる。

第Ⅲ章 原間経塚の発掘調査

第1節 発掘調査の概要

原間経塚は、南巨摩郡南部町本郷329番地の原間家の敷地内に所在する。本郷地域は船山川が東流して富士川に合流する、その流域一帯にあたる。江戸時代の本郷は、享保9年（1724）から幕府領となっているが、田畠を中心とした農村部であり、宝暦6年（1756）の村高帳では440石余となっている。すぐ近くを富士川沿いに駿州往還の南部宿があり、助郷の出役が義務づけられていた。文化（1804～18）初年の戸数は145戸であり、人口は651人となっている。経塚のある原間家は、船山川左岸の原間地区にあり、南に緩やかに傾斜する台地上に位置する。付近には日蓮宗の本郷寺、山王神社、若宮八幡神社がある。

原間経塚は、屋敷地のほぼ北方にあり、かつて屋敷神および八幡神社を祭祀していた場所である。建物はすでに撤去され、現状はその基壇部に二重の方形の列石が残されているだけである。外側の列石は一辺が4.4mであり、内側の列石は一辺が3.4mとなっている。経塚はその内側の列石の中央から北側に寄った位置にあり、列石と同じ柱状の石を用いて一辺が1.2mの正方形の石囲いを構成している。この石囲いの中に2～5cmほどの一石経が大量に納められていた。

平成11年2月末～3月にかけて発掘調査を実施し、深さ90cmの石室内より約64,000点の一石経を検出していいる。また、副納品として「寛永通寶」一枚が出土している。

以下に調査の経過を示すと次のとおりになっている。

原間経塚発掘調査日誌

平成11年2月26日 本日は、調査初日のため、現状の写真撮影を行った後、造構上部の経碑、蓋石を取り除いた。蓋石下にはすでに一石経が露出しており、幅40cm～80cm程度の石により区画された横80cm、縦70cm程の区画内に1cm～4cm大の河原石が埋められている。上部の経石を少し取り除き、周囲を区画する石が明確に露出した段階で清掃し、造構実測と写真撮影を行った。経碑については、拓本と実測を行った。

平成11年3月1日 本日は、経塚周辺の測量を行い、縮尺1/40で全体平面図を作成した。それと平行して昨日検出した経石の造構を半截し、40cm程掘り下げた。経石は周囲に石組みを積み重ねた中に集中して埋納されており、床面はまだ確認できていないが、本日40cm程掘り下げた段階では3段目までの石組みが確認できている。明日は経石をさらに半截をすすめ、床面を確認後、すべての経石を取り上げる予定である。

平成11年3月2日 本日は、経塚の半截部分をさらに掘り下げた。60cm程度まで掘り下げたところで古銭が1点出土し、レベリング、写真撮影の後、とり上げ、さらに掘り下げた。地表面より80cm掘り下げた時点で、造構が狭いためそれ以上の掘り下げが困難となり、造構を全面的に掘り下げるという方針に切りかえ、全面的に経石を取り上げた。経石周囲の石組みは、4段目までが確認できているが、床面はまだ確認できていない。

出土品 古銭1点（No1）半截部分を60cm程度掘り下げた時点で経石の間より出土。

平成11年3月3日 本日は、昨日より引き続き経石全ての取り上げを行った。昨日は地表面より80cm弱程掘り下げてあったが、それよりさらに5cm程掘り下げたところで、経石はなくなり、土の層が変わったため、その面で掘り下げを終了し、写真撮影と、東西方向、南北方向のエレベーション図を作成し、造構周辺のレベリングを行った。明日は、遺跡周辺の地形測量として等高線を測量した後、造構の埋め戻しを行い、作業終了の予定である。

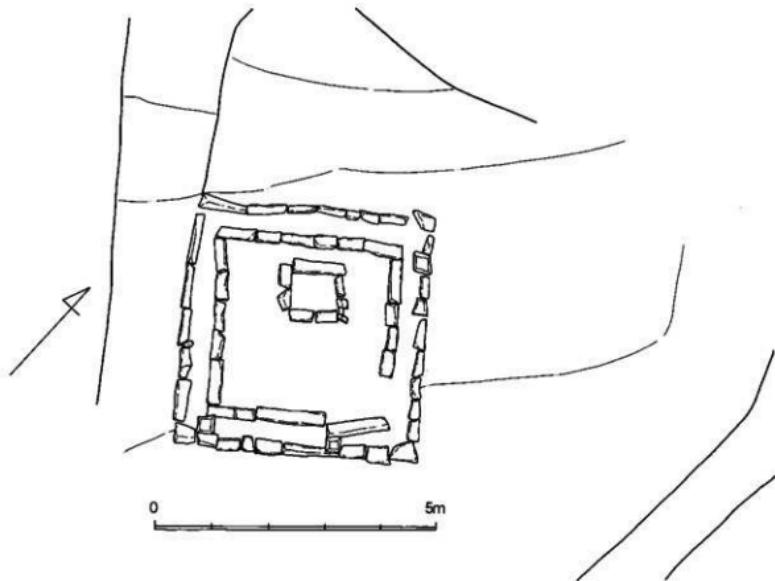
出土状況 経石に混入している土は、黒色でやや粘性のあるやわらかい土であり、遺跡周辺の土とほぼ同じような土であるが、造構床面の土は明茶褐色で粘り気のあるきめの細かい土であり、やや固くしまっていて、版築したような感じが見受けられる。

平成11年3月4日 本日は、昨日まで全ての経石を取り上げたので、経石の埋納されていた小石室の

壁面の実測図を作成した。さらに遺跡周辺の等高線を0.2mおきに測量し、平板測量の遺跡周辺図を完成させた。ここまで全ての発掘・測量が終了したため、遺構保護のために経石の埋納されていた小石室を簡単に埋め戻して調査を終了した。

出土状況。石室の壁はいずれも4~5段の石によって組まれており、石の表面程の面も平らで、加工したものであろうと思われる。いずれの面も、一番下の段の石は50~60cm大の大きな石を用いており、これらの石は、原間家母屋裏などに見られる石垣に用いられている石と同様のものであると思われた。

第2節 発掘された遺構と遺物



原間経塙実測図

1. 遺構

石塙 基壇は一边が4.4mの正方形であり、柱状の石を用いて縁石としている。基壇の高さは15~20cmである。また、基壇上には同じく柱状の石を敷き並べた列石があり、その一辺が3.4mの正方形となっているが、建物の基礎の列石と思われる。さらに、この内側に小石室となる方形の石組みが確認された。柱状の石を用いた石組の一辺は1.2mの正方形であり、この小石室の位置は、列石の北西寄りになっている。この小石室の上に柱状の石をもって蓋をした状況が認められ、さらに経碑が立てられていた。

なお、基壇上には近年まで建物が存在していたが、現在は撤去されている。建物内部で発見された棟札の銘文によれば明治19年（1886）とあることから、当初にあたる江戸時代の建物の改築がうかがわれる。近年までの建物内部は2段になっていて、下段は経碑を立てた小石室部分で、上段には八幡神社を祀る木造の社が置かれていたという。

石室 柱状の石を組んで造られた石室は、一辺が1.2mとなっているが、内径は長径が80cm、短径66cm、

深さ85cmである。石室の壁は四面ともに柱状の石およびそれと同質の小さな石材で4段～5段を積み上げて構築している。なお、底部には敷石などは見られず地山となっている。この石室内より一石経が約64,000点出土している。

2. 遺物

経碑 石室上部に据えられていた経碑は、高さ46cm、幅は上部9.5cm、下部で8.5cmとなっている。碑面の銘文は次のとおりであり、中央の主銘文は「奉納妙典石経一部」と刻み、右側には「享保二十乙卯□」、左側には「願主 渡辺五右衛門」とある。なお、願主名は不鮮明で読み取りが不十分であるが、原間家でかつて確認しているのは、渡辺五右衛門であり、原間家の祖先であるという。主銘文に「妙典」とあることは、書写された一石経が法華經であることが推定されたが、そのことは調査後の整理によって確認することができた。

錢貨 一石経以外では「寛永通寶」一点である。石室内の深さ約60cmにおいて一石経に混じって検出された。一石経の埋納時に投入されたものであろう。一石経の共伴物としては、塩山市寺屋敷経塚において刀身が2点副納されていた例が知られるが錢貨の事例としては初めてといえる。

一石経 出土した一石経は長径2～5cmほどの大きさで偏平な石であり色調は黒色を呈している。総数64,368点となっているが、墨書きされた文字は読み取りが難しく、「文字の見えないもの」35,255点、「文字のあるもの」29,113点である。大部分は「一面に一文字」であるが、「両面に文字のあるもの」は216点である。

なお、書写した人數については同一文字が多數あるものを選び、同一文字間を比較したところ、複数の者で書写したと思われる結果を得ている。なお、一石経の中には年号や人物名等と考えられるものは確認されなかつた。

第3節 まとめ

1. 原間経塚は、山梨における近世経塚の発掘調査としては5例目（寺屋敷経塚、近久保経塚、高源寺経塚、富士山北口一合目経塚）であり、経碑と一石経が明確になっている事例としては、高源寺につぐものである。

原間経塚は、一石経を埋納するにあたり、地中を掘り込むだけの土坑ではなく、石を組んでしっかりした小石室を設けている。また、法華經を書写する石についても若干の大小はあるものの均質の石を選んでいて、経塚造営に慎重に取り組んでいる様子をうかがうことができる。

埋納された一石経は、過去にその一部が散逸していることも考えられるが、その6万数千点確認できたことは、一石に一字以外に多字一石がある程度含まれていることや、法華經の二十八品のうち、譬喻品第三、陀羅尼品第二十六、普賢菩薩勸發品第二十八の一部を示す一石経が確認されていることなどから、法華經の全文を書写しているように思われる。また、一石経の書写はその書体の検討から複数名だったことが認められる。なお、法華經は卷一～卷八までの二十八品となっており、全文で69,607字である。

近世の一石経の経塚には副納品がぎわめて少ないといえるが、原間経塚では錢貨一点が出土している。一般に古代の経塚では、経筒の周囲に鏡・合子・玉・刀身や仏具などが納められていることが多いが、近世の塩山市寺屋敷経塚では刀身が2本検出されている。このことは、経塚を邪惡なものから守護するために武器類を副納したと思われる古代の経塚造営の思想を受けつぐものであろうか。また、中世の経塚において錢貨を納める事例が知られるが、奉賽錢的な意味を原間経塚でも引き継いでいるのであろう。

身延町には日蓮宗の身延山久遠寺が存在することから、富士川流域には日蓮宗寺院が多く見られるが、それらの寺院では遠忌塔の造営を行っていて、その碑文の中に一石経を書写していることが読みとれる事例もあり、また実際に一石経が発見されている例も知られている。遠忌塔の造営は日蓮没後四百五十年、五百年などのように節目に供養を行うものと思われるが、多くの信者を結集して宗派の公宣流布を目的とし、一石経の書写を行っているのであろう。このように寺院側の主導を元に一石経の書写が行われた事例に対して、原間経塚は個人的規模

での造営で、その願意も子孫繁栄などであったかもしれない。経塚が營まれた享保20年（1935）は、享保18年（1733）甲府の米価が西国への飢饉の影響で高騰し、飢渴にせまるものが多く出たり、翌19年（1734）には都留郡の村々で飢饉救助願が提出されているが、これらの社会的不安を背景にして、原間家の先祖渡辺五右衛門は國家安穏などを願ったかもしれない。

2. 原間経塚出土一石経文字一覧表

一面文字

安	23	阿	135	惡	49	塵	1	哀	10	愛	3	頬	1	暗	1	闇	4	已	106	以	171	夷	14
医	1	圓	15	委	1	易	2	威	7	為	247	畏	25	患	8	異	10	意	39	革	1	遠	1
謂	20	一	277	逸	6	溢	1	引	4	印	1	因	33	姪	1	又	76	于	79	右	1	有	263
雨	18	憂	13	優	21	云	18	雲	5	会	40	回	4	衣	22	廻	1	瑰	1	慧	47	壞	5
懷	11	穢	5	營	2	衛	2	悅	2	宛	1	延	1	宴	2	捐	2	焰	5	蠭	1	厭	3
演	24	緣	20	閻	3	於	373	王	166	応	48	狂	1	邑	2	往	17	黃	1	惶	1	雄	2
横	1	擴	2	億	76	憶	8	應	1	越	2	怨	6	贊	1	音	96	飲	3	園	3	遠	25
瘡	1	穢	10	惑	1	火	20	加	4	可	48	伽	23	法	1	果	15	珂	1	迦	46	荷	2
訶	50	蹠	3	過	43	歌	9	瓦	1	何	90	我	243	河	16	臥	3	餓	2	戒	8	海	13
界	76	皆	121	械	1	聞	12	害	4	蓋	7	蠍	1	各	34	角	1	郭	1	覺	11	闇	1
学	13	岳	1	樂	62	堅	1	活	1	渴	4	竭	2	月	19	合	32	千	36	甘	1	官	2
巻	10	乾	12	堪	2	寒	1	敢	6	勸	9	澳	15	歎	36	艱	1	覲	49	岸	2	願	46
卉	3	危	2	吉	5	奇	1	紀	2	既	6	記	20	豈	5	起	29	鬼	15	基	1	喜	75
幾	2	貴	1	毀	5	跪	1	匱	1	器	3	嬉	3	闌	1	伎	8	宣	10	祇	19	耆	2
偽	1	義	22	疑	27	議	13	却	1	客	1	擊	2	急	1	給	4	及	126	交	3	坑	3
孝	1	更	13	況	17	莖	2	教	27	經	188	頃	1	敬	47	輶	11	僕	9	膠	1	鏡	1
競	2	驚	2	巧	1	行	101	形	12	曉	2	凝	1	琴	1	禁	1	緊	11	九	5	久	26
口	5	孔	1	丘	62	功	58	句	6	旧	1	共	19	吼	1	究	12	供	88	拘	2	苦	23
垢	3	宮	17	恐	3	蒸	25	胸	2	蛇	1	救	4	鳩	1	鼓	7	纏	1	弘	1	求	19
具	44	俱	26	躬	2	愚	4	窮	4	空	33	遇	5	崛	3	窟	1	薰	2	軍	1	群	1
化	53	仮	3	氣	3	希	7	快	2	僵	9	家	15	惱	1	華	150	飢	1	戲	15	懈	3
鬱	2	下	36	外	10	悔	1	偈	47	解	54	礙	2	計	2	繼	1	諂	11	繁	1	毘	1
欠	2	決	10	結	4	齧	1	見	131	兼	2	眷	16	陥	1	堅	7	問	58	權	1	遺	6
甄	2	懼	3	袞	1	賢	18	顯	4	玄	1	咸	14	倦	4	患	6	現	84	眼	16	滅	1
闇	7	還	17	顛	2	己	9	戸	2	乎	4	去	27	古	1	巨	4	固	9	居	3	怙	3
孤	1	故	120	庫	1	虛	31	許	1	蹠	1	礎	2	五	51	牛	5	吾	4	其	184	後	45
娛	1	悟	4	御	3	湖	1	眠	7	語	20	誤	1	篠	1	護	30	廣	31	甲	3	光	33
向	5	好	11	江	1	劫	81	怯	3	肯	2	厚	2	皇	1	矜	1	香	80	降	2	高	23
槁	1	講	5	曠	2	号	18	仰	5	告	59	迎	2	恒	33	剛	3	強	2	毫	2	業	4

豪	4	曲	4	刻	1	国	73	黑	5	械	2	極	1	獄	10	忽	2	骨	1	今	101	困	1
金	17	恨	1	根	19	軒	1	含	2	言	164	近	24	欣	2	勤	22	銀	3	嚴	46	懶	4
作	98	坐	34	座	28	切	94	西	3	災	1	妻	1	婆	7	宰	2	差	2	濟	2	齋	1
最	19	歲	7	載	1	摧	1	在	71	哉	15	財	7	罪	15	數	54	察	1	薩	256	三	159
璫	1	散	5	算	3	讚	17	殘	1	暫	3	士	9	子	160	之	227	支	16	止	8	氏	1
四	72	此	197	旨	1	死	14	至	64	伺	1	志	9	使	18	枝	3	思	29	指	3	師	78
恣	2	斯	25	訾	1	齒	5	賜	4	璫	1	蘋	1	示	15	地	46	字	3	寺	1	次	18
自	71	事	38	侍	7	治	1	恃	1	持	85	值	13	時	206	視	3	慧	6	辭	2	色	16
識	8	直	2	食	10	植	3	飾	8	七	35	質	2	失	9	室	4	疾	8	悉	35	濕	2
嫉	2	寔	23	写	9	沙	38	車	12	舍	42	者	198	捨	10	釡	27	碑	4	賊	3	遮	1
闇	5	灑	1	邪	3	尺	1	石	2	赤	3	昔	12	借	1	索	2	惜	3	賣	2	積	3
錯	1	著	15	鑿	2	手	2	主	8	守	9	取	6	妓	1	首	9	修	60	殊	19	珠	8
酒	1	衆	287	須	17	種	100	瘦	1	趣	6	鬚	2	囚	1	寿	27	受	63	呪	10	授	11
就	14	頌	5	聚	4	從	45	終	5	獸	1	緩	1	板	2	宿	23	出	59	旬	6	順	7
楣	2	処	62	初	5	所	275	書	18	諸	568	除	14	小	18	少	17	正	40	生	222	声	109
妾	1	性	7	青	7	謠	31	樹	28	蠻	1	収	1	周	13	宗	5	拾	1	臭	4	執	4
習	7	集	5	醜	2	十	125	充	9	住	61	重	31	照	6	聖	12	精	17	障	2	請	2
賞	1	上	93	丈	4	成	71	爭	1	杖	5	定	10	尚	1	片木	1	乘	48	城	9	淨	52
常	86	情	2	盛	6	場	10	誠	3	靜	4	調	12	諍	1	濁	8	心	120	身	110	辛	2
信	45	星	1	莊	27	特	13	消	3	称	18	笑	4	商	4	清	24	章	1	勝	6	掌	17
燒	17	葉	9	証	8	詔	2	撰	3	侵	6	真	25	慎	1	新	4	頭	6	震	1	親	24
尽	43	沈	2	臣	11	甚	29	神	48	訊	1	深	23	進	19	陳	1	塵	16	塗	5	頭	15
水	19	吹	5	垂	7	衰	4	推	5	遂	2	睡	1	誰	8	雖	25	隨	35	瑞	3	世	310
施	14	是	610	勢	10	誓	6	逝	2	刺	4	竊	1	殺	1	設	6	說	358	舌	6	千	30
山	33	川	1	仙	4	先	8	宣	29	專	1	洗	1	穿	1	施	3	栴	9	旋	5	鞍	3
撰	1	鮮	2	瞻	10	羣	2	全	2	前	17	善	132	禪	16	漸	11	膳	3	祖	1	疎	1
蘇	1	帀	3	爪	3	走	2	相	50	草	10	送	1	倉	1	喪	1	僧	28	想	6	聰	1
瘡	2	躁	1	羣	2	蔽	1	造	4	曾	42	象	7	像	8	增	11	雜	1	藏	12	繪	4
即	75	足	43	則	24	息	5	速	6	側	2	塞	14	触	1	俗	1	族	2	屬	23	囁	1
村	1	尊	157	損	2	多	81	侘	22	埵	1	陀	51	駝	1	体	3	弟	18	帝	4	待	3
退	10	泰	1	逮	1	蹄	8	顛	1	大	273	台	7	怠	3	第	32	提	62	戴	2	宅	11
度	77	脫	19	逮	9	闊	10	丹	1	旦	1	但	11	單	2	彈	1	短	1	歎	9	嚮	1
擅	16	断	1	池	2	知	118	致	2	智	84	稚	2	置	1	輝	1	癡	5	畜	10	笛	1
適	1	擲	2	中	128	虫	1	木丑	1	柱	2	籌	2	猪	2	打	1	長	33	帳	1	張	1
頂	4	鳥	1	暢	3	聽	29	聘	1	瞓	1	勑	6	珍	10	追	1	通	42	痛	1	泥	3
鉄	6	天	142	点	3	展	7	転	47	顛	3	田	1	伝	1	典	11	畋	2	殿	11	姤	2

兜	1	都	1	屠	1	覩	2	土	60	刀	8	当	135	東	5	到	12	討	1	逗	1	塔	26
等	177	答	9	燈	9	擣	1	蹈	2	同	16	倒	1	動	6	堂	4	童	7	道	140	儂	1
導	8	幢	4	蹕	1	得	240	德	95	毒	8	独	3	特	1	詭	34	貪	15	鈍	2	壘	3
那	28	南	3	乃	40	内	6	奈	1	男	28	軟	1	難	49	二	101	尼	77	而	171	耳	12
爾	117	肉	3	辱	13	日	45	若	238	弱	2	入	31	柔	2	女	38	如	326	汝	76	寧	2
繞	13	餽	10	人	290	仁	1	任	5	姪	1	忍	25	奴	2	涅	25	禡	1	年	11	念	68
然	21	惱	26	納	3	能	115	礪	3	躋	40	把	1	波	17	破	12	婆	77	頰	4	薄	1
抨	9	背	1	鼙	3	倍	4	唄	1	迫	1	珀	4	縛	1	八	48	殼	1	鉢	1	跋	5
半	2	槃	26	旛	9	比	98	圮	1	彼	41	肥	1	非	29	卑	2	疲	4	秘	1	被	1
悲	18	誄	2	臂	1	譬	17	尾	1	毗	7	琵	1	鼻	11	履	1	驛	2	必	4	畢	1
筆	2	逼	2	百	101	白	37	辟	12	壁	1	鼈	1	兵	1	表	1	漂	2	平	7	並	8
病	12	屏	1	賓	1	搃	1	績	1	蠶	2	頻	1	蕪	3	不	297	夫	23	付	2	布	15
怖	7	婦	2	富	8	敷	6	覆	6	父	23	跌	1	奉	10	峯	1	浮	5	部	5	復	108
舞	1	風	3	福	23	腹	1	蝮	1	伏	5	服	9	仏	639	分	28	薩	1	閉	1	弊	1
別	20	反	3	辺	29	返	1	変	11	偏	7	癡	22	弁	4	便	63	菩	289	慕	2	方	92
宝	138	放	7	法	366	報	4	坊	4	謗	4	北	2	萄	3	撲	2	弗	27	拏	1	堯	23
髮	3	本	19	奔	1	品	17	梵	19	煩	4	曼	18	摩	53	磨	4	魔	10	壳	1	攷	4
昧	22	遇	2	莫	4	寔	1	末	4	抹	9	沫	1	万	109	満	13	慢	18	蔓	1	鑿	1
未	52	味	5	弥	25	眉	3	美	8	微	19	魅	1	密	2	蜜	7	覓	1	藐	44	名	51
妙	69	命	22	明	46	猛	4	貌	2	鳴	1	廟	6	民	8	愍	13	牟	22	無	273	質	1
夢	2	蒙	1	馬	2	碼	1	罵	7	迷	1	母	10	毛	2	妄	2	忘	2	望	1	網	3
木	9	目	9	墨	1	默	4	勿	11	没	41	物	10	文	29	門	28	問	20	悶	2	聞	148
也	7	冶	1	夜	18	耶	136	野	2	亦	145	益	11	葉	30	躍	5	鑑	1	由	37	油	7
幽	2	曳	5	涌	5	蚰	1	猶	6	愈	1	踊	7	論	17	唯	21	惟	8	維	2	友	1
用	3	勇	4	遊	16	傭	1	与	64	予	1	余	27	永	1	羊	1	要	2	容	2	搖	1
詠	1	遙	1	羨	88	嬰	1	曜	1	璫	16	欲	78	蘿	1	羅	180	礼	20	来	155	雷	6
纏	1	珞	15	絡	1	落	4	亂	4	蠟	1	櫛	2	利	72	里	2	梨	3	晉	3	經	1
璃	6	離	11	雞	1	力	56	律	1	慄	1	略	2	歷	2	立	6	籠	40	慮	1	了	1
令	75	伶	1	涼	4	陵	1	量	116	鈴	3	領	1	靈	1	林	7	倫	1	恪	1	輪	21
庵	1	陋	1	流	3	留	2	樓	9	瑤	9	盧	1	累	2	類	8	贏	2	隸	4	劣	3
恋	2	練	1	蓮	25	炉	2	路	4	漏	21	歸	4	老	6	勞	3	良	3	六	29	諭	9
和	3	窟	1	或	50	惑	3																

両面文字（別字）

三	道	1	義	於	1	佛	衆	1	金	佛	1	諸	供	1	勳	座	1	之	所	1	舍	合	1
日	善	1	此	安	1	令	虛	1	沙	履	1	是	見	1	福	滿	1	上	至	1	則	當	1
發	渢	1	成	座	1	行	書	1	家	リ	1	若	夜	1	迦	月艮	1	夷	田	1	佛	者	1
餘	可	1	萬	難	1	人	法	1	還	者	1	衆	數	1	是	為	1	佛	如	1	於	等	1
度	リ	1	諸	能	1	因	取	1	亦	落	1	善	舍	1	偏	華	1	何	此	1	上	歲	1
經	者	1	佛	戒	1	大	住	1	乃	及	2	今	令	1	羅	化	1	天	其	1	菩	薩	1
佛	無	2	卽	天	1	彼	後	1	比	處	1	諸	說	1	逸	白	1	今	智	1	人	時	1
此	化	1	爾	量	1	卽	既	1	如	宮	1	坐	林	1	不	業	1	法	菩	1	無	身	1
脫	衆	1	不	薩	1	諸	國	1	時	重	1	可	尹	1	表	坐	1	除	丘	1	願	當	1
立	宣	1	時	無	1	願	處	1	有	滅	1	說	知	1	薩	國	1	實	相	1	三	名	1
丘	戸	1	采	祈	1	受	若	1	不	須	1	人	分	1	諸	智	1	皆	雖	1	蓋	法	1
如	爾	1	此	意	1	上	成	1	今	燒	1	來	奉	1	羣	衆	1	一	量	1	說	外	1
如	皆	1	利	所	1	兒	日	1	千	諸	1	千	不	1	不	法	1	與	悟	1	耶	信	1
世	法	1	與	衆	1	一	受	1	法	男	1	文	不	1	提	喬	1	怠	法	1	轉	為	1
至	炎	1	不	日	1	聞	令	1	湧	迦	1	不	僧	1	戲	力	1	使	成	1	以	千	1
以	波	1	如	迦	1	若	福	1	若	人	1	善	大	1	善	言	1	善	如	1	華	立	1
華	樹	1	是	我	1	是	如	1	此	如	1	夜	衣	1	故	日	1	等	轉	1	德	得	1

両面文字（同一字）

弊	弊	1	唯	唯	1	作	作	1	瑠	瑠	1	者	者	1	寅	寅	1	億	億	1	爾	爾	2
是	是	1	於	於	1	人	人	1	涅	涅	1	賢	賢	1	夜	夜	1	逼	逼	1	等	等	1
隣	隣	1	唯	唯	1	貪	貪	1	誦	誦	1	宮	宮	1	乾	乾	1						

両面文字（片面直し）

説	念	往	多	生	施	親	△	阿	除	傾	倒	衰	辛	齡	轉	尊	升	汎	法	聲	聖	ハ	分
某	其	瓊	珠	亦	示	憲	蜜	聞	阿	肉	阿												

数字のあるもの

履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	履	
三	六	五	十	二	十三	十四	口	反	田	煙	十	六	十七	十	八	十九	口	底	第	六	第	八	治	帝
爾	賦	利	提	耆	枳	隸	隸	杞	杞	瞿	尼	刺	刺	刺	刺	刺	刺	刺	第六	帝九	帝三十	二四十	盧	福
一	二十	七	二	六	三	一	二	八	三	九	三十	六十											四	三十七
		十六	十六	二十																				
咩	辨	哆	敵	屍	一賣																			
音	反	都	反	猪	服																			
七	鳴	反	驗	都	服																			

第IV章 近世の経塚

第1節 山梨の経塚研究史

江戸時代の地誌、紀行文、日記、隨筆などには、しばしば経塚に関する記述がみられる。松平定能撰の『甲斐国志』(1814年)や黒川春村の『並山日記』(1850年)があり、当時の人びとが経塚遺物などに強い関心を示していたことをうかがうことができる。

『甲斐国志』古跡部のうち、秋山氏居館(中巨摩郡甲西町秋山)に関する記述の中に、慶安年間の頃、秋山の熊野権現社の一隅から掘りだされたという経塚遺物の詳細な記述がみられる。出土した銅製經筒の銘文から建久8年(1197)に甲斐源氏加賀美遠光の四男光経が経塚を営んだことが知られる。熊野権現社は遠光の嫡男で源頼朝に滅ぼされた秋山光朝の居館跡とされる所であり、その場所からの経塚遺物の出土は関心の高いものであったに違いない。また、秋山経塚については、『並山日記』にも經筒などが写生図入りで紹介されている。これらの記録類から鎌倉時代初期の経塚造営の一端を知ることができる。

さらに、『甲斐国志』仏寺部の鷺飼山遠妙寺(東八代郡石和町市部)の項には「鷺飼済度ノ經石七ツ、毎石一字ヅツ南無妙法蓮華經ノ字ナリ」とあり、寺宝とされる一石経を紹介している。この遠妙寺の經石については、『並山日記』にも「まさやかのうかひ川とて、日蓮上人の經石をうつみたりしも、此ちかきほとゝ聞えたれと、いたくくさむしたればゆきもたつねす」とあり、江戸時代に盛行した一石経の経塚に関連する記述がみえる。近世におけるこれらの記述は、珍しいものの紹介としての扱いであり、学問的な経塚研究は近代に入ってからのことである。

明治34年(1901)に山中笑は「經石に就きて」(『考古界』第一編六号)を発表し、「最も名高き經石」として遠妙寺の經石をあげ、その出土地についても「石和川水中」や「遠妙寺の後方の地」とする考えを示している。なかでも注目されることは、「經筒を埋むる事の絶たる時代これに代りて經石を埋むる事の行はれしことかと思わる」と述べ、経塚造営の時代による違いを指摘していることである。

明治40年(1907)には高橋健自によって「經筒沿革考」(『考古界』第六編八号)がまとめられた。この時期までに知られた全国の經筒を集成し、經筒年表を作成している。經筒に刻まれた銘文を並べているが、山梨の經筒としては建久8年(1197)在銘の秋山經筒と、明治20年から27年(1887~94)頃に北巨摩郡大草村(蘿崎市)で発見された永正18年(1521)在銘の經筒があげられている。永正18年在銘の經筒は、すでに山中笑、和田千吉によって報告されていたが、このような中世的な経塚遺物である小形經筒をも含めた古代から中世までの在銘經筒の紹介は、経塚の時代的な様相を理解するうえで重要な意義をもつものであった。

大正2年(1913)に善応寺(中巨摩郡白根町大嵐)の裏山から平安時代の陶製經筒および磬、刀身、鉄鎌などが発見された。この経塚遺物については、石田茂作が「経塚から磬を発見した事それ自らが既に珍しい事であるが、その磬の鉄製であるのは、更に興味を覚える」(『経塚』『考古学講座』1927)として、経塚の副納品に磬のあることに注目して紹介している。善応寺は臨済宗妙心寺派となっているが、『寺記』によれば鎌倉円覚寺末で仏源禪師を開山している。なお、善応寺に伝わる一木造りの千手觀音像は平安期の作とされていることや、経塚が発見されたことと合せて、天台系の前身寺院としての存在が考えられている。

また、同年には雲峰寺經塚(塙市上萩原)の発見もあった。平安時代の銅製經筒や陶製壺の經容器および銅鏡、火打鎌が雲峰寺裏山から出土している。火打鎌が副納品として出土した経塚は数少ない例である。雲峰寺も臨済宗妙心寺派の寺院であるが、かつて真言宗または天台宗であったといわれている。同時期に発見された善応寺經塚と雲峰寺經塚は、山梨の古代の経塚例として貴重である。これらの経塚遺物については、東京国立博物館に保管されており、藏田蔵によって「經塚論4」(『MUSEUM』154 1964)で紹介されている。

昭和37年(1962)は山梨の経塚研究上きわめて重要な発見があった。康和5年(1103)在銘經筒の発見である。この經筒が出土した経塚の所在地は、東山梨郡勝沼町柏尾地内の白山平である。発電所の水路取入口の工

事中に自然石を用いた小石室6ヵ所現われ、4ヵ所から経塚遺物が発見されたという。康和5年在銘の銅製經筒、陶製外筒、銅製經筒、陶製容器、刀身、小玉、經軸などが出土しているが、特に康和5年在銘經筒は蓋に4行、身には本文23行、別記4行で783字という長文の銘があり、経塚造営に関する重要な史料を提供している。東日本で紀年銘のある經筒としては最古に位置づけられるこの經筒について、磯貝正義、仁科義男、上野晴朗、清水茂夫、馬淵和夫らが歴史学、考古学、国語学などの分野から研究報告を行っている。

昭和36年（1961）、上野晴朗は「甲斐國發見の鎌倉・室町時代陶器」（『甲斐路』第3号）の中で、秋山経塚の陶壺を中世陶器の研究という面から扱っている。さらに、上野は康和5年在銘經筒の『考古学雑誌』48-2号への発表の中で、他の經塚との関連にふれながら「平安までさかのぼる經塚は、主として山岳仏教派生の盆地縁辺の名刹に結びついて經塚が造立されて」といふとし、「鎌倉中期以後は専ら特定の地方豪族の信仰供養の目的から造立されるもの多くなることを指摘している。県内においてそれまでに発見されていた經塚を紹介し、その造立について検討を行っていることは、山梨の經塚研究のうえで注目される内容である。

中世の經塚については、永正18年在銘經筒の出土した大六塚が知られていたが、昭和33年（1958）には上藏原經塚（北巨摩郡高根町）が発見された。盛土状の場所を開墾中に天文21年（1552）在銘の小形經筒と銭貨12枚が出土した。これについては赤星直忠・山本寿々雄によって、「山梨県北巨摩郡高根村出土の葡萄唐草文のある經筒について」（『県立富士国立公園博物館研究報告』3・1960）の報告がある。

さらに、塔の越經塚（北巨摩郡双葉町下今井）がある。經塚から出土した遺物は、円筒の紀年銘がみられる。この經塚については飯島進が、「甲斐國北巨摩郡双葉町塔の越出土の經筒」（『甲斐考古』1・1966）と題して発表している。また、三宅敏之は、「塔の越經塚－廻國納經に伴う一例として－」（『甲斐考古』5の2・1966）を報告している。さらに、「六角宝幢式經筒について」（『東京国立博物館紀要』第四号・1969）の中でも、塔の越經塚の詳細な報告をしている。これらの中世經塚の研究動向は、それまでとかく經塚研究といえば古代を中心に進められていた傾向がみられたが、中世、近世の經塚についても取り扱うことの重要性を認める気運が生じてきた現わであろう。昭和54年（1976）、菊島美夫は秋山経塚の出土品実測図を載せ、考古資料化を図っている。（『甲斐考古』13の1）

昭和59年（1984）に南巨摩郡富沢町徳間から、伝世品ではあるが經塚遺物と考えられる「藤原頭長」銘の短頸壺が発見された。この涅美窓の壺については、清雲俊元等によって「富沢町徳間発見の頭長・遠清銘の短頸壺について」（『甲斐路』52・1984）の報告がある。この報告にもあるように「頭長・遠清」銘の壺が出土した經塚は、静岡県三島市において発見されているのが唯一であり、これとの関連から徳間の壺も經塚遺品として検討する必要性が指摘されている。

昭和60年（1985）、七覚山円楽寺（東八代郡中道町右左口）に伝世されていた小形の銅製經筒が確認された。この元亀2年（1571）在銘の六角形の經筒は、塔の越經塚について二例目である。すでに知られているものは塚に埋められていたが、これは社寺へ奉納した可能性があり、田代は「七覚山円楽寺の經筒と廻國納經」（『山梨県考古学論集』1・1986）で、中世の奉納經筒のあり方について検討を行っている。

また、同年には甲府市上積翠寺の一の森經塚の発掘調査が行われた。山梨における本格的な考古学調査としては初めての例となった。調査の結果、平安時代末期から鎌倉時代にかけての三基の經塚が報告された（「一の森經塚発掘調査報告」『甲府市史研究』3・1986）。

1970年代から80年代初めまでは、本県の經塚研究も停滞状況にあったといえよう。このことは經塚の新資料を扱うことができなかったことにも原因があろう。80年代中頃になって、古代や中世の新しい資料が加わり、再び經塚研究が前進する契機になった。

昭和62年（1987）、田代は「山梨の經塚」（『山梨県考古学協会誌』創刊号）において、県内の經塚遺跡や經塚遺物を集成し、山梨の經塚研究の現状と課題を述べている。特に研究分野として未開拓である一石経の經塚を取り上げ、古代、中世に統く近世の經塚としての紹介を行っている。

さらに、平成元年（1989）、「近世の經塚について－山梨の一石経經塚を中心として－」（『考古学雑誌』

74-4) を報告し、平成6年(1994)、「近世における一石経の遺跡」(『山梨考古学論集』Ⅲ)で、引き続き県内の資料集成を行い、近世の經塚の様相を探っている。また、昭和63年(1988) 塩山市の寺屋敷經塚、平成元年(1989) 大月市の近久保經塚、平成5年(1993) 甲府市の高源寺經塚、平成8年(1996) 富士山北口一合目經塚の発掘調査が行われ、近世經塚の考古学的取り組みが増えてきた。平成11年(1999)には民間信仰遺跡分布調査の一環として南部町の原間經塚の発掘調査が行われている。

第2節 山梨の經塚

1. 経塚について

經塚と呼ばれている遺跡は、紙本經や一石經などの經典を主体として埋納した場所である。近年、經塚の起源については、中国大陆や朝鮮半島であるとする考え方も提起されているが、わが国の經塚は、10世紀後半頃に畿内で始められたとされている。なお、寛弘4年(1007)に藤原道長が大和國の金峰山で行った埋經が經塚造営としては最も早い事例である。

11世紀から13世紀初頭に當まれた經塚は、写經した經典を土中に納めることから埋經とも呼ばれているが、經典以外にも銅鏡、刀身、合子、錢貨などの副納品が納められている場合が多い。このような經塚の造営の背景には、社会不安から仏典を書写し、土中に埋納し、弥勒下生の時まで備えようとする思想が認められるのである。全国的な広がりを示した埋經の經塚も、12世紀中頃を盛期として次第に衰退し、13世紀にはほとんどみられなくなる。

16世紀に入ると回国聖(六十六部聖)の納經と結びついた經塚の造営が流行する。埋納には小形の經筒が使われているが、諸国の大場への奉納にもこの小形の經筒が使われている。中世末期に盛行した納經の經塚は、現世利益や追善、逆修供養のために當まれたものが多い。そして、回国聖の活動を反映してその分布は広範囲に及んでいる。

一石經の經塚は、中世に出現しているが庶民が主体となって當まれるようになったのは16世紀後半からであり、江戸時代に盛行する。一石經は小石に一字ないし數文字の經文を書写したものであり、多いものでは8万というものもある。共同体の病魔退散や五穀豊穣を願って一石經の書写を多数の参加によって行っている。また追善、逆修、死者供養をはじめ寺院の地鎮具や鎮魂具などにも一石經が用いられており、古代や中世のやや限定的な經塚のあり方とは異なり、多様なあり方を示している。

山梨の經塚についても各時代にわたってその存在が知られているが、近年の発掘調査によって新資料も報告されている。とりわけ近世の一石經が増えている。

2. 古代の經塚

山梨における古代の經塚は、平安時代の經塚をはじめ、それを受けつぐ鎌倉時代のものを加えて六例である。經塚の分布は、甲府盆地の縁辺部で盆地を眺望することができる山上に集中している。勝沼町の真言宗の大善寺は、かつては天台宗と推定されている。この寺域の山林より発見されたという大善寺經塚、大善寺東側の谷を隔てた白山平で工事中に発見された柏尾山經塚、塩山市にある臨濟宗の雲峰寺は、甲斐國の鬼門に当たることから戦国武田氏の祈願所とされ前身寺院は真言宗と考えられている。隣接する金毘羅神社の一隅で発見された雲峰寺經塚、白根町の臨濟宗の善応寺は、藤原期の千手觀音像を安置している。この裏山の林道工事で発見された善応寺經塚、甲西町の熊野神社において江戸時代に発見された秋山經塚、近年発掘調査された甲府の一の森經塚などである。

六例の經塚の造営年代は、經筒の紀年銘から柏尾山經塚が康和5年(1197)である。なお、柏尾山經塚は六基、一の森經塚は三基と複数の經塚が存在し、各經塚の造営時期も異なっている。經塚遺物の内容から山梨の古代の經塚は、12世紀初頭から導入され、13世紀頃まで當まれたことは確かなことといえよう。

柏尾山經塚の康和5年在銘の銅製經筒は、筒身に744字、蓋に39字があり、合計で783字と長文が刻まれてい

る。和漢混淆文の文章は、勧進僧寂円の生い立ち、出家の動機や年齢、如法経書写の目的、場所、期間から写経後の供養や埋納の場所、日付、関係人名、寺院名にいたるまで記述しており、経塚造営の実態を詳細に伝えている。ちなみに紀年銘のある経筒では、東日本で最も早く造営された経塚として知られているものである。

柏尾山経塚の造営には、比叡山の学僧であった柏尾山寺住生院の堯範が導師となっていることや、雲峰寺や善応寺の前身が天台系であると推定されていることから、甲斐国における経塚造営の受容にあたって天台寺院が深く関わっていたことが知られよう。

これらの経塚は工事中に発見される場合が多くあり、そのために遺構、遺物などにおいて破損や一部を滅失してしまったこともあります。しかし、柏尾山経塚や一の森経塚では、石組の小石室の存在や紙本経を納めた経筒およびその外容器をはじめとし、鏡、刀身、玉類など各種の副納品が出土しており、古代の経塚の形態をよく示しているといえよう。

この時期の経塚造営の担い手は、康和の経筒の銘文からも知られるように、政治的支配層を形成する人々であった。寂円による写経は康和2年（1100）正月頃から5年（1103）3月頃までと長期にわたり、写経後の行事も4月3日に行われたが国府に関係する藤原氏や在地の有力氏族の三枝氏などが参加している。同年4月22日柏尾山寺の東方の白山山腹に埋納を行なって、満3年にわたった事業は終ったのである。以後も埋経の機運は国中に広がり、大善寺、雲峰寺、善応寺などを拠点に営まれたといえよう。

なお、12世紀初頭に経塚造営の風習が畿内より伝えられた段階では、その造営の目的も公的、社会的な要素を保持していたが、やがて12世紀末になると次第に身内による追善供養などを主体とする私的、同族的な実践が顕著となってくるようである。

秋山経塚は、甲斐源氏の一族秋山光朝の追善供養として、弟の光経によって建久8年（1197）に営まれたものであった。光朝は加賀美達光の長子であり、治承4年（1180）源頼朝の伊豆における挙兵にはじまつ鎌倉幕府創建期の激動の中で、かつて平氏方に身を置いたことが災いして滅ぼされたとされる人物である。

一の森経塚は、1985年に発掘調査され、花崗岩の露顯する山頂において三基の経塚が発見された。第一経塚は、角柱状の石を用いて小石室を設けた中に陶製容器が納められていた。第二経塚は、一辺が80cmの方形で底部が敷石の石室を設けており、内部から陶製容器が約7個体分が破片の状態で出土している。第三経塚は、岩盤のすき間に角柱状の石を据えて小石室としていた。青磁と白磁の破片が出土している。

経塚は破壊を受けていたが、発掘調査によって貴重な資料を得られたといえよう。第二経塚の多量の陶製容器の存在は、経塚造営の規模を反映したものであろうか。鎌倉時代の初頭に位置づけられるとすると、この造営者は秋山経塚と同じく在地の有力者層が想定されるのである。

山梨の古代の経塚については類例も少なく、しかも偶然ともいいくべき発見であることが多く、資料的に経塚研究の進展に影響を及ぼしている。しかし、経塚遺物などの詳細な研究の発展や新資料の増加などにより、新たな経塚研究の発展を期待したい。

3. 中世の経塚

中世の経塚としては、19世紀末頃に韮崎市大草町で発見された大六塚（上条東割経塚）があり、永正18年（1521）の紀年銘のある円筒形の小形経筒が出土している。その後、天文21年（1552）銘の円筒形経筒が出土した高根町の上藏原経塚、永祿4年（1561）銘の円筒形経筒と、当年（16世紀）銘の六角宝幢形経筒が出土した双葉町の塔の越経塚がある。さらに近年、中道町の七覚山円楽寺において、元亀2年（1571）銘のある六角宝幢形経筒が発見された。

これら的小形経筒を納めた経塚は、中世の六十六部聖に深く関わるものである。法華經を書写し、これを一国に一部ずつ納経してまわる六十六部聖は、回国聖とか六部とも呼ばれている。聖たちは16世紀に入ると納経に際して、小形で規格化された円筒形や六角形をした経筒を盛んに用いるようになる。

この種の経筒は、全国で約300点があり、紀年のあるものは約230点とされている。形態としては、円筒形の

ものは16世紀の前半から中頃までのものが多く、西日本より東日本での発見例が多いことと、六角形のものは16世紀の中頃から後半にかけてが多いことが指摘されている。山梨の発見例からも、その傾向はうかがえるものとなっている。

山梨の六十六部聖に関わる納経の經塚は、小形經筒を土中に納めるために土盛りをして塚を築いた大六塚（上条東割經塚）、上藏原經塚、塔の越經塚の三例と、円乗寺の小形經筒のように直接寺院に納めた例がある。このように納経の經塚には埋納と奉納という二つのあり方が認められている。

なお、全国的には110ヶ所余りの小形經筒の発見地がある。しかし、実際の場所は全国六十六ヶ所の靈場やそこに関連する場所からは少ない結果となっている。七覚山円乗寺は、大分県の余瀬家文書の「六十六部奉納札所」（16世紀後半）に、横根と七覚山の二寺が見えることや、宝永4年（1707）の『塩尻』の「六十六部聖順巡拝」の中に六十六ヶ所の寺院がみえ、甲州は七覚山があげられている。そして中、近世において七覚山円乗寺が靈場であったことは、寺側に伝世されていた元亀2年銘の經筒によっても確かめられるのである。これに対して、大六塚、上藏原經塚、塔の越經塚は、いわゆる一国を代表するような靈場ではないようである。きわめて地域的なこれらの經塚の存在は、六十六部聖の広範な活動に基づくことが想定される。

奉納經筒としてきわめて特徴的な事例がある。島根県大田市南八幡宮の鐵塔に奉納されたものである。160点のうち6点が甲州のものである。永正18年（1521）「巨麻郡甘利庄」、大永5年（1525）「巨麻郡加賀美」、大永7年（1527）「府中」、天文5年（1536）「甲州」、天文12年（1543）「甲州」、不詳（16世紀）「黒駒」であり、円筒形の經筒である。関東地方の經筒からも甲州の聖によるものも発見されており、甲州の六十六部聖も広域的に活動していたことが知られる。

16世紀の六十六部聖は、回国納経に際し、ある所では經筒を奉納し、他の所では写経を奉納し、あるいは納札を行うなど、いくつかの方法を使いわけて選択したことであろう。六十六部聖は一国一ヶ所で六十六ヶ所をめぐることを基本としながらも、主たる靈場に限る者や一国内に限る者など、さまざまな納経活動を展開したのである。その中で各地において納経行為の一環として經塚造営が行われたと考えられるのである。

納経に用いられた經筒は、銅板製で鍍金が施されている。高さは10センチ前後と小形であり、種類は円形、六角形が主体で、数例の八角形がある。規格性の強いこれらの經筒の筒身に刻まれた銘文も書式が類似している。圓乗寺經筒は六角形（六角形宝幢形）であるが、その銘文は次のとおり。

〔十羅刹女 下總住人圓金坊

〔(釈迦坐像) 奉納經王六十六部

〔三十番神 元亀二年今日日

中央上部に釈迦如来、図でなく種子の場合もある。「奉納經王六十六部」の主銘文を中心に、右に法華經を守護する「十羅刹女」と左に「三十番神」の文字を記し、經筒を奉納した六十六部聖の国名（下總國）と人名（圓金坊）、および奉納の年月日（元亀二年=1571年今日日）を記し、場合によって願文も付加する。

經筒内に納められた紙本経は残りにくいが、いくつかの資料では法華經であったという。山梨の事例では塔の越の六角形經筒に紙片の付着がわずかに見られる程度である。經典を入れた經筒の土中埋納にあたっては、陶製の壺や石櫃を用いることはわずかであって、その多くが直接埋納である。副納品についても鏡、刀身、錢貨などがみられるがわずかな事例である。なかでも比較的多いのが錢貨であるが、十数例である。塔の越經塚では開元通宝から洪武通宝までの138枚が出土している。上藏原經塚でも12枚となっている。以上のような状況は、經筒の土中埋納自体も簡略化したこととも関連して、副納品の扱いも軽くなつたのであろう。

先に述べたように、回国納経に際して六十六部聖は、追善供養をはじめ現世利益を目的とした納経を広範な人々に勧め、その依頼主のために納経の方法として、經筒を塚に埋納したり、寺社に奉納したり、ある所では写経を奉納し、あるいは納札を行つたのである。六十六部聖による小形經筒を用いた納経は、16世紀末の織豊期にはほとんど行われなくなる。

中道町右左口の千野家には、正徳3年（1713）から享保3年（1718）にかけて六十六部の回国を実行した千

野忠右衛門の納経請取状164通が残されている。回国納経の風習は近世に入っても持続していることが知られるのである。

4. 近世の經塚

近世の經塚は、川原石などの小石を用いて經典を書写した一石經（礫石經）を土中に埋納したところである。また、その場所に記念碑としての標識（經碑）が建てられることが多い。一石經は、一個の石に經文を一字ずつ書いたものが多く、これを一字一石經と呼び、數文字あるいは数十文字などの場合を多字一石經と呼んでいる。このような一石經の書写埋納は、江戸時代に盛行期を迎えるが、その要因に近世社会における庶民層の台頭と信仰の広がりをうかがうことができる。それゆえに、山梨の各地においても一石經の經塚の存在を知ることができる。

1901年（明治34）に山中笑氏は『考古界』に「經石に就きて」を発表し、「最も名高き經石」として達妙寺の經石を紹介し、經石については「經卷を筒へ納め地中へ埋めし經筒と經石とは連続するもの」との見解を述べている。以後、一石經の經塚については市町村誌などに散見するものの、近世經塚としての認識のもとに積極的にとりあげた研究はほとんどない。1987年の『山梨県考古学協会誌』の中で「山梨の經塚」が発表され、近世經塚が紹介された。その後1988年から89年にかけての黒川金山遺跡の調査の一環として行われた寺屋敷遺跡において、一石經の經塚が発掘された。続いて89年には近久保經塚、93年には高原寺經塚が発掘され、近世經塚への関心が高まってきた。

今回分布調査で取りあげることができた經塚遺跡は60ヶ所ほどである。これらから山梨における近世經塚の様相を考えてみたい。

勝沼町山の大塚經塚は、延享2年（1745）の經碑と一石經が数点および經塚造営の経過を記した文書のある事例である。經碑には「妙典全部書写石經塔」とある。塩山市千野の千野經塚は、「經石供養」と刻んだ宝暦8年（1758）の經碑の下から数千点の一石經が発見されたが、近くに移転し再埋納されている。御坂町夏目原經塚は、宝暦8年の「法華石經塔」を移設する際に、多量の一石經が出土したので再埋納したという。韮崎市穴山町の重久經塚は、「書写大乘妙典一部一石拝禮供養宝塔」とある寛保4年（1744）の經碑と数点の一石經である。

韮崎市旭町の上条北割經塚は、1850年代後半に建立された日蓮宗の題目塔の移転に伴い一石經が出土した。南部町の葛谷峠經塚は、日蓮五百年遠忌の題目塔の下部より5万点におよぶ一石經が出土した。

南部町と富沢町の境になる篠井山の山頂の篠井山經塚は、「妙法華經石」とある元祿7年（1694）の經碑の下部から一石經が発見されている。

西桂町の三ツ峠經塚は、「經王一字一石供養塔」とある天保6年（1835）の經碑と採集された一石經である。武川村下三吹經碑は、寛政3年（1791）で「大乗經一石一字書写供養塔」とあり、一石經が確認されている。富沢町馬込の正行寺の本堂須弥壇下に約400点の一石經が保管されていた。一石經の中に天保10年（1839）の年号が見られる。

塩山市の恵林寺鐘楼の基壇から49点の一石經が発見されている。一宮町田中の瑞蓮寺經塚は「南無阿弥陀佛」とある天明元年（1781）の經碑の下部より、「南無阿弥陀佛」と書写された一石經が出土している。

次に一石經の埋納は不明であるが經碑を紹介する。塩山市平沢經碑は享保3年（1718）で「一字一石法華經」とある。双葉町の米沢經碑は、天保13年（1842）で、碑文は「きやうつか」とあってきわめて特徴的な例である。櫛形町上市之瀬の妙了寺經碑は、文化12年（1815）で、「經石塔」とある。甲西町鰯沢の古長禪寺經碑は、宝暦11年（1761）、文化6年（1809）、天保8年（1837）の「大乘妙典一字一石塔」の三基と、嘉永元年（1848）の「一字一石法華塔」がある。甲府市若松町の信立寺經碑は、享保16年（1731）で「南無日蓮大菩薩」とある。大月市梁川町の新倉經碑は、享保15年（1730）で「法華經一部一字一石納所」がある。勝沼町勝沼の泉院經塚は、「經印塔」「一字一石拝」とある延享元年（1744）の經碑である。

近世經塚の発掘調査としては、塩山市の寺屋敷遺跡がある。鷲冠山中腹の尾根上に營まれた經塚であり、一石

経は7万～8万点が推定され、そのうちの1万3千点余が取り上げられた。多字一石経などから法華経を書写したことが明らかになっているが、造営時期は確定されていない。

大月市近久保經塚は、直径8m、高さ2mで円形状の頂上部分より、多数の縁に混じって一石経が出土している。なお、時期は不明とされている。

甲府市高畠町の高源寺經塚は、宝暦7年（1757）に五百年遠忌の塔を建て、その下に一石経を4千点ほど埋納したものである。

南部町本郷の原間經塚は、享保20年（1735）の経碑があり、石囲いの石室内より約6万4千点余の一石経が発見されている。

山梨の近世經塚の造営時期は、17世紀末から19世紀後半までが確認できる。なかでも大塚經塚や泉勝院經塚については、文書に造営の様子が記してあり、きわめて貴重な事例である。大塚經塚では又右衛門が村中へ願い、郷歳の南東の一角に一石経を埋納し経碑を建てたという内容であり、また泉勝院經碑は若尾嘉七と佐十郎兄弟が造営したことが具体的に知られる。

18世紀に入って經塚造営が盛行していく背景には、農業技術の進歩や普及により、農村社会の生産力の高まりがある。商業的作物の導入などによる貨幣流通の進展により、近世農民としての成長の中で、造塔、造仏、經塚造営や社寺參詣などの宗教行為が盛行する。このような風潮のもとに、經塚造営においては、多数の人と多量の経石を用いることによって、大きな功德が生みだせるという多数作善という思想が、近世庶民層に經塚造営を広く受容させることになったと思われる。

第3節 一石経の經塚

1. 一石経の埋納

一石経の埋納方法としては、「塚状に土盛りした中に一石経を納める」（近久保經塚）、「一石経そのものを積み上げる」（寺屋敷經塚）、「地中に土坑を設けて一石経を納め、その上に経碑を立てる」（葛谷峠經塚）、「建物の床下などに一石経を納める」（恵林寺一石経）などが知られた。なお、一石経の経碑を多く紹介したが、一般的には、経碑の下部に一石経が埋納されている場合が多い。

一石経埋納施設は、葛谷峠經塚の例のように多くは土坑であったといえよう。壺や箱などを経容器として用いたものは知られていないので、一般的には直接土坑内に一石経を納入していたようである。なお、全国的には横穴式古墳の石室内を利用している例もみられる。勝沼町山の大塚經塚もその一つであろう。

一石経と共に刀身の一部と須恵器片が発見されていることや、『辻家記録』に「古キ塚有候ヲ掘崩シ経石埋メ」とあることから、古墳を利用した經塚であることが知られる。古墳分布が顯著な地域での經塚地名は、古墳の經塚への再利用の可能性を考えてみることも必要であろう。

一石経の書写は、一石に一字ずつ墨書きした一字一石経の例が多く、一石に複数の経文を記す多字一石経の例は少ない。何千、何万という一石経を書写するにあたって、複数の者が書写したことがうかがわれる。近久保經塚の一石経では、楷書と行書の書体がみられる。また、明らかに筆跡の異なる例もある。

書写した經典の種類は、一石経の出土状況などからその一部であり、不明であることが多い。一般的には一石経の經塚に埋納された經典は、法華経であることが指摘されている。

經碑にみえる「妙典」「大乗妙典」「法華」「經王」「法華經」「大乘經」などは、法華經を意味しているが、經碑の下に法華經を書写した一石経が埋納された可能性が十分あるといえよう。

また、塩山市黒川の寺屋敷經塚は、取り上げた一石経は13,453点であり、総数約8万点と推定している。取り上げた一つに「一心称名」とあるのは、法華經の觀世音菩薩普門品第二十五の一部であると指摘している。

法華經は巻一から巻八までの二八品で、題字などを入れて全文は69,607字であり、そして、使用されている文字は千八百数十文字である。このことから、一石経が約5万点出土している南部町十島の葛谷峠經塚では、一部を除いた法華經を埋納したのであろう。南部町本郷の原門經塚では、一辺が1mほどの石囲いの石室から約6

万4千点の一石経が出土している。その分類整理によって法華經であったことが明らかとなっている。富沢町馬込の正行寺の一石経は、多字一石経であり、法華經の二八品の中の「序品第一」「方便品第二」「如來壽量品第十六」「從地涌出品第十五」「妙音菩薩品第二十四」などとあり、法華經である。

なお、甲府市高畠町の高源寺經塚のように、石の中に墨書きの痕跡がみられないものを含んでいるが、石をより多く積むことに意味があったのであろうか。

これらの一石経經塚の副納品は、古代や中世の經塚と異なり、大部分が一石経のみを埋納しているようである。寺屋敷經塚では、一石経の堆積層の直上に「刀子」が発見されており、数少ない副納品の例である。刀子の存在は教典の護持という考え方を示すものであろう。

2. 一石経の願意と多數作善

一石経の書写供養の願意は、一部の經碑や多字一石経などから知ることができる。古長禪寺經碑群のように、自然石を用いた宝曆11年（1761）の「大乘妙典一字一石塔」などでは、刻まれた文字も少なく願意なども不明である。一方、文化6年（1809）、天保8年（1837）の「大乘妙典一字一石塔」や、嘉永元年（1848）の「一字一石法華塔」などは、切り石を用いた角柱型の經碑であることから、四面に文字が刻まれ願意も詳細に記されている。

これらの碑文によれば、「國家安寧」「武運長久」「五穀豐登」「萬民和樂」「家門福壽」「子孫栄久」などの現世利益にもとづくものや、また、父母の追善供養であることがうかがえる。鰐沢町箱原の天神ヶ滝經塚は、富士川舟運の水難者の供養のためであったことが知られる。全国的にも豊作祈願、病魔退散祈願などをはじめとする、きわめて身近な願いによって各地に一石経經塚が営まれているのである。

ところで、近世の經塚と古代・中世の經塚の違いは、中世までの經塚が一部の者により造営されたのに対し、近世の經塚は多数の者が参加すること自体に經塚造営の意義を認めたことの違いであろう。一石経の書写埋納は多数参加のきわめて容易な供養であり、多數作善そのものであった。

多數作善の思想は、広範に信者を結集し、一人一人が少しの經典書写を行い、多量の書写を成就することである。これらに参加する人びとが受けた功德は、個人の供養よりもはるかに優り、参加者が多ければ多いほど相乗的に功德は増大するというものである。

蘿崎市旭町の上条北割經塚では、基台に近隣17か村の村名が刻まれている。「村講中」とあり、各村の題目講の人びとが参加して、一石経を書写し、經碑の題目塔を造立したのであろう。この造立にあたって、広く信者に縁を結んで作善を勧めたのは、日蓮宗の大輪寺であったといえよう。

また、一石経の埋納場所の一つとして、建物の床の下の例について大月市初狩町の保雲寺一石経は、建物の建築時に地鎮具として埋納されたものと考えておきたい。今回の分布調査で確認された恵林寺鐘楼の一石経は、明らかに地鎮具としての役割をもった例と考えられる。山梨県では確認されていないが、骨蔵器と一石経が共伴している例などから、一石経が鎮魂的な意味を持つことも考えられるのである。

さらに、一石経の伝説の中に、石和町の鵜飼山遠妙寺の一石経は、日蓮が鵜飼の翁の亡靈を済度したときのものといい、大月市の念佛塚の一石経は、親鸞が毒蛇済度したときのものと伝えている。民間伝承での一石経は、呪術的効果をもつ呪具として扱われている。

これらのことから、近世における一石経の書写は、それを後世に残すことを目的に土中深く埋納したのではなく、その多くが村落共同体や個人にとっても切実な社会的願望である五穀豐穰、病魔退散、あるいは追善供養、逆修供養などに經文の呪力を期待して供養を行ったのである。

3. 一石経經塚と寺院

一石経の經塚と宗派との関係をみたとき、日蓮宗との関連が注目される。その背景は「日蓮上人鵜飼済度の經石」として、近世を通して有名であった石和町にある鵜飼山遠妙寺の一石経の存在である。

日蓮の身延山を有する甲州は、早くから日蓮の伝説なども多く、また、寺院数も一国で400カ寺と多い。日蓮は弘安5年（1282）10月13日に亡くなるが、江戸期に入ると四百遠忌（天和2年・1682）、四百五十遠忌（享保17年・1732）、五百遠忌（天明2年・1782）、五百五十遠忌（天保3年・1832）が行われ、各地で遠忌塔が造立されている。

『甲府の石造物』によれば、五百遠忌が美咲1丁目の養行寺、住吉本町の要明寺、国母8丁目の法元寺、五百五十遠忌は朝日5丁目の青雲寺、若松町の信立寺、国母4丁目の淨蓮寺などの遠忌塔を紹介している。なお、信立寺では一石経の書写が行われていることが確認できる。

甲府市の高源寺經塚は、宝暦7年（1757）の經碑がある。正面に「南無日蓮大菩薩」、裏面に「後五百歳中廣宣流布」とある。「後五百歳中」は、四百五十遠忌と五百遠忌の中間の年は、すなわち宝暦7年にあたる。「廣宣流布」は、仏法を広く宣伝することである。遠忌と遠忌の中間を一つの節目として、布教拡大を祈願して一石経の書写供養を行ったのであろう。

日蓮宗における遠忌塔や題目塔の造立と一石経の関係について、最も早いものとしては、篠井山經塚（元禄7年・1694）が知られたが、葛谷峠經塚、高源寺經塚や上条北割經塚の例から、その一端を知ることができた。なお、遠忌塔や題目塔の造立のすべてが、一石経の書写埋納を伴ったかは今後の課題であるが、一石経と日蓮宗の密接な関係をうかがうことができる。今回の調査でも身延山久遠寺のある南巨摩郡下ではその関係の深いことが知られた。

他の宗派と一石経の関係をみると、臨済宗では夏目原經塚（慈泉院）、古長禪寺經碑（長禪寺）、東陽院經碑（東陽院）があり、曹洞宗では千野經塚（常光院）、重久經塚（福泉院）、泉勝院經碑（泉勝院）、保雲寺一石経（保雲寺）がある。臨済宗、曹洞宗とともに一石経經塚に深く関与していることが知られる。日蓮宗、臨済宗、曹洞宗と一石経の関係が確認されたが、一石経の書写埋納や經碑造立における各宗派の具体的な取り組みを明らかにすることも重要であろう。なお、今回の調査では一宮町の瑞蓮寺から「南無阿弥陀佛」の一石経が出土している。浄土宗と一石経の関係を示すものであり興味ある事例である。

4. 経塚の地名

「小字一覧」から經塚に関連するものを示すと次のようである。

京塚（甲府市上阿原町）、經場（甲府市上帯那）、京塚（山梨市正徳寺）、經塚（韮崎市穂坂町上今井）、京塚（韮崎市三ツ沢）、經塚（勝沼町上岩崎）、經塚（勝沼町山）、經塚（勝沼町休息）、京塚（御坂町夏目原）、西京塚（御坂町夏目原）、黒經塚（御坂町成田）、經塚（一宮町国分）、經塚（一宮町中尾）、京塚（河口湖町小立）、石塚（南部町中野）、その他、塚がつく小字名は多いが、大部分が古墳と関連するようである。また、富士塚、不二塚などは富士山信仰に関わるものであり、行人塚（御坂町金川原）、山伏塚（一宮町上矢作）、法印塚（忍野村忍草）などは、行人や道者の修行場、または祭場と関係すると思われるものもある。

小字名の「經塚」「京塚」などについては、近世の一石経經塚との関係を反映しているものといえよう。勝沼町山の經塚、御坂町夏目原の京塚、一宮町中尾の經塚は、先に一石経經塚として紹介したところである。これらの例からも地名で經塚と呼んでいる地域の詳細な調査は重要であろう。例えば勝沼町山の真光寺西側は、地図によれば經塚とあり、その地番の一筆は周囲よりも1メートルほど盛土状に高くなっている場所である。そして、地元でも經塚と呼んでいる。さらに、この經塚から少し離れた地域が富士塚であるが、そこにも一筆が2メートルほどの盛土状に残っている場所がある。そこについても地元では富士塚と呼んでいる。

經塚と富士塚に関連して、次のような例もある。『北巨摩郡勢一般』（1930）の中に、日野春村（長坂町日野春）に「三ツ塚」があり、各六尺余で京塚、福千賀塚、富士塚が信州路を挟んで東西にあることを紹介している。これらの調査も期待されるところである。

5. 絵図中の經塚

『五海道其外分間見取延絵図』は、幕府が道中奉行に命じて作成させた街道絵図であり寛政から享和期（1789～1803）にかけて調査や測量を行い、文化3年（1806）に完成させて幕府に献上している。その中に「甲州道中分間延絵図」がある。これについては同時に作られた絵図が山梨県立図書館にある。

この絵図には街道沿いの塚も記録しているのが知られる。阿弥陀海道宿の「念佛塚」、竜王町の「供養塚」、下今井村の「経塚」、穴山の「供養塚」などが認められる。

下今井村（双葉町下今井）の経塚は、街道沿いで集落の境界ともいるべき位置にあるが、現在は一石経の経塚らしきものは消滅しており、「廿三夜塔」が立っている。

阿弥陀海道宿（大月市笛子町吉久保）の念佛塚は、元文年間（1736～41）に造立された「親鸞聖人念佛塚」である。『甲斐国志』古跡部には名号塚として、その伝承を詳しく紹介している。内容は、「毒蛇と化した吉という娘が街道沿いの池にあって往来人を悩ましていたのを、親鸞が毒蛇済度のため名号を石に書き池に投げ入れ成仏させた」というものである。また、「弥陀ノ名号石塚中ニアリ数百歳ヲ經ルニヤ文字中ニシミ入り」磨いても消えないとし、さらに「七八十年前ハ數多掘り出セシガ今ハ掘り尽シテ絶エテ得ガタシ」と記している。

竜王新町の供養塔は、長旅に疲れた旅人の行き倒れを悼んで、その供養と安全を祈って「南無阿弥陀佛」の六字名号塔を立てた場所である。穴山の供養塚も同様のものであろう。

『甲斐国志』の編さんに用いた村絵図の一枚に、文化3年（1806）の田野倉村絵図がある。それによれば村の南で往還沿いに「ヲ經ヅカ」と記されている場所がある。現在の都留市田野倉の桂川にかかる大原橋の脇である。「ヲ經ヅカ」は不明である。

図 版

1. 上藏原經塚



1-3 天文21年銘經筒



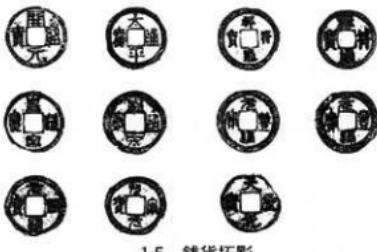
1-1 經塚位置



1-2 中村家墓地



1-4 実測図と拓影

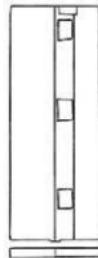


1-5 錢貨拓影

2. 上条東割經塚

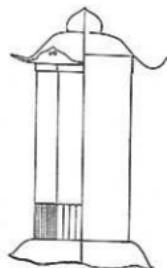


2-1 永正18年銘經筒



2-2 實測図

3. 塔之越經塚

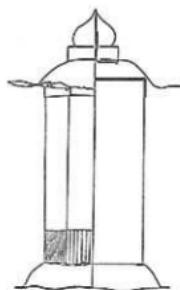
3-1 永禄4年銘經筒(左)
当年銘經筒(右)

3-2 六角形經筒實測図

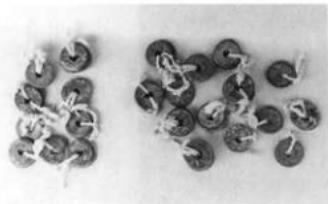
4. 円乗寺經筒



4-1 元亀2年銘經筒



4-2 六角形經筒實測図



3-3 錢貨

5. 寺屋敷経塚

図版 2



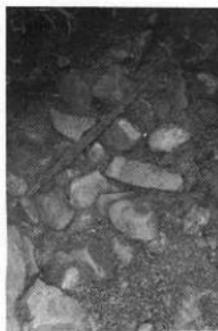
5-1 調査風景



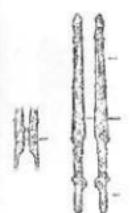
5-2 一石経出土状況



5-3 一石経出土状況

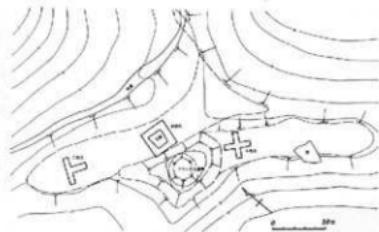


5-4 刀身出土状況

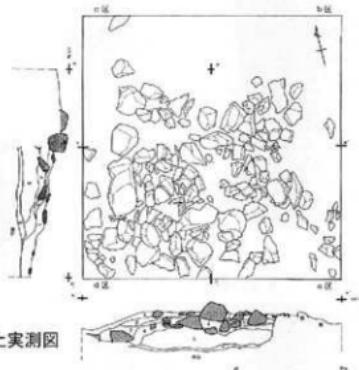


5-5 刀身実測図

「甲斐黒川金山」1997年より



5-6 位置図



5-7 一石経出土実測図



5-8 一石経実測図

6. 惠林寺經塚



6-1 鐘樓解体



6-2 屋根解体



6-3 鐘樓桟木



6-7 梵鐘



6-8 基壇隸石



6-5 安政3年銘墨書



6-6 人名墨書



6-9 基壇基底部



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



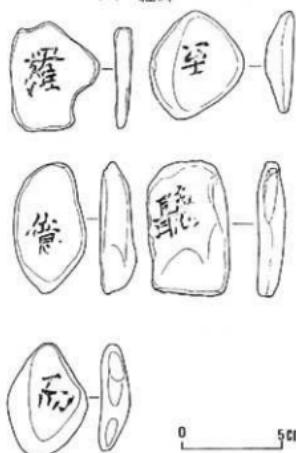
6-10 鐘樓基壇出土一石經



7. 千野経塚



7-1 経碑



7-3 一石經実測図



7-2 経碑拓影



8. 平沢経碑



9. 上塩後経碑



10. 景徳院経碑

11. 大塚經塚



11-1 大塚經碑



11-2 一石經



12. 泉勝院經碑



13. 中尾經碑

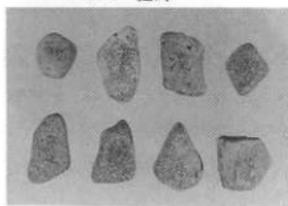
14. 夏目原經塚



14-1 経碑



15. 成田經碑



14-2 一石經



16-1 連妙寺山門



16-2 一石經

17. 瑞蓮寺經塚

圖版7



17-1 経碑（正面）

17-2
経碑拓影（左側面）



（右側面）



（裏面）



17-3 一石経（1）



(2)



(3)



(4)



17-4 瑞蓮寺全景絵図



17-5 一石経実測図



17-6 一石經實測圖

18. 市川經碑



経碑拓影と写真(1) (正面)



(2) (右側面)



(3) (裏面)

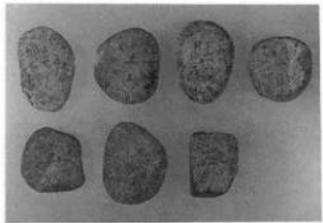


(4) (左側面)

20. 神明前經塚



19. 大工經碑



一石経 (1)



(2)



(3)

21. 鐙堂經碑

図版
10



(1) 経碑（正面）



(2) (右側面) 24. 上津金經碑

22. 橫針經碑



23. 小倉經碑



(1) 経碑（遠景）



(2) (近景)



(1) 経碑（正面）



(2) (右側面)



26. 龍泉院經碑



25. 米沢經碑

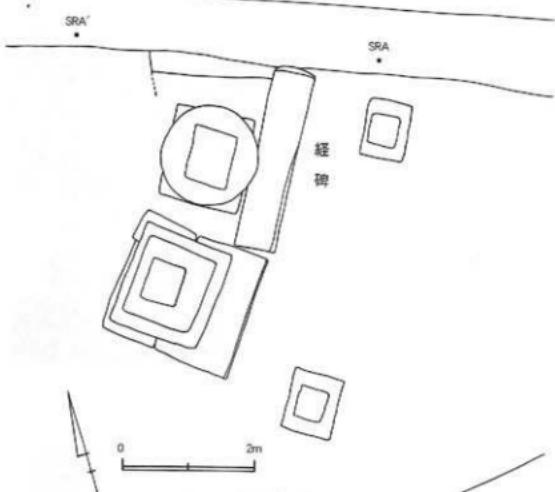


27. 黄梅院經碑

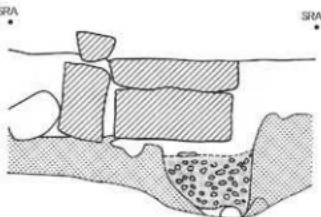


28. 法泉寺經碑

29. 下三吹経塚



29-1 経塚実測図



29-2 石室右側面図



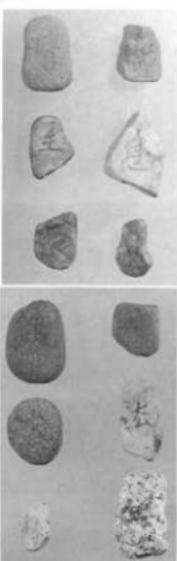
29-3 石室(右側面)



29-4 調査風景(1)



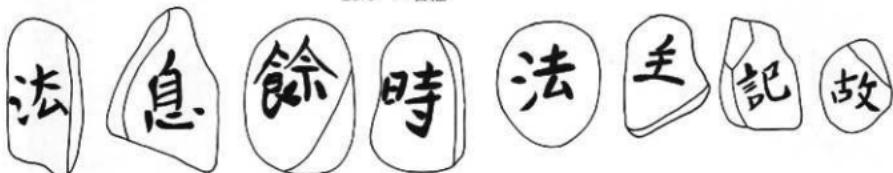
(2)



29-5 一石経



29-6 経碑拓影



29-7 一石経実測図

30. 上条北割経塚



30-1 経碑

31. 重久経塚



31-1 経碑



32. 新倉経碑

32-1 経碑



30-2
拓影



31-2 一石経



34. 三ッ峠経碑



35. 松山経碑



33. 東陽院経碑



36. 富士山吉田口一合目経塚

36-1 一石経出土状況



36-2 一石経

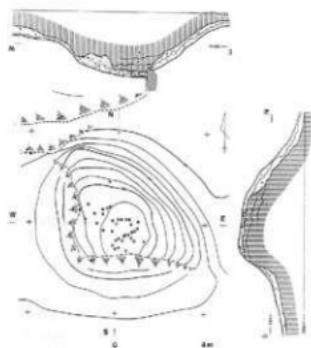


37. 妙法寺経碑

38. 近久保経塚



38-1 経塚の発掘調査



38-2 経塚の実測図

39. 吉久保経碑



(1) 遠景



(2) 近景

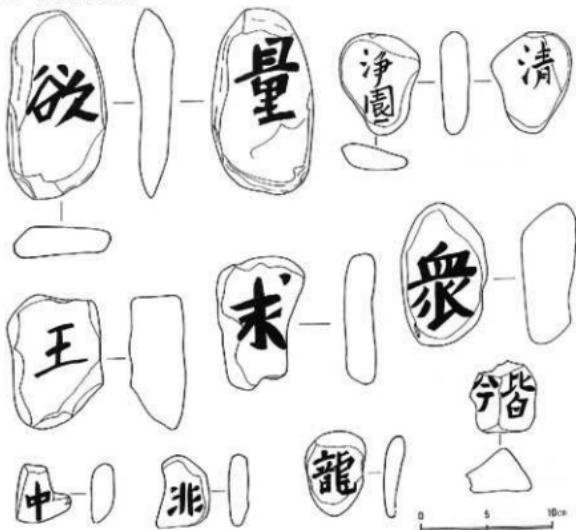


38-3 一石経



38-4 一石経実測図

40. 保雲寺経塚



一石経実測図

41. 本光寺經碑



42. 玉泉寺經碑



43. 真篠經碑



44. 篠井山經塚



44-1 経碑



44-2 拓影



44-3 篠井山

45.
正行寺經碑



45-1 経碑



44-4 一石經実測図



45-2 一石經



45-3 法華經の一石經

46. 原間經塚



46-1 経碑拓影



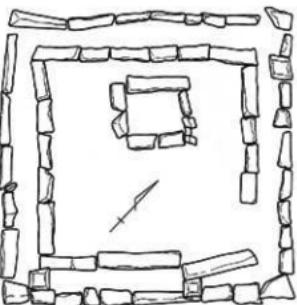
46-2 経碑



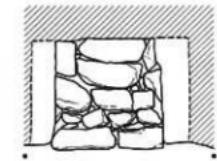
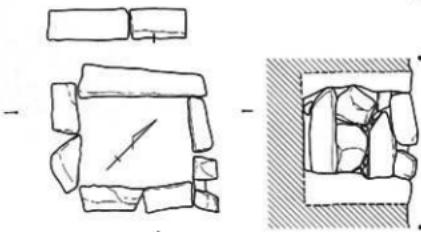
46-3 調査風景 (1)



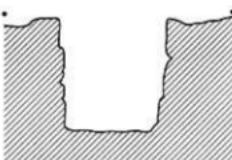
(2)



46-4 経塚実測図



46-5 石室実測図



46-6 石室セクション図

46-7 石室の調査

図版
16



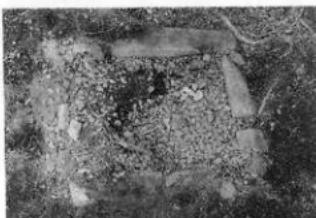
(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(1)



(2)



(3)

46-8

一石経の整理



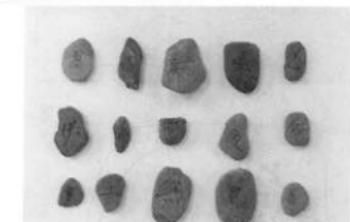
(4)



(1)

46-9

一石経



(2)



(3)



(4)



46-10 一石経実測図と錢貨拓影

47. 葛谷峠経塚

図版18



47-1 経塚位置図



47-2 経碑 (1)



(2)



47-3 一石経



47-4 一石経実測図



48. 十島經碑

49. 切石経碑



(1) 遠景



(2) 近景



(1) 正面

51. 法師倉経碑



(1) 正面



(2) 右側面



(2) 左側面

53. 経石寺経碑



(3) 一石経



52. 法界寺経塚



54. 隆昌院経碑



55. 妙了寺経碑

56. 古長禪寺經碑

圖版 20



(1)

(2)

(3)

(4)



57. 大塚經碑

(1) 遠景

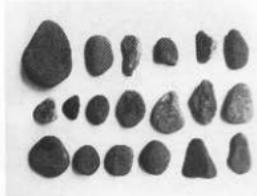


(2) 近景



58. 高源寺經塚

58-1 調査風景



58-2 一石経



58-3 経碑



(1) 経碑正面



(2) 右側面



60. 仏乘寺經碑

報告書概要

フリガナ	ミンカンシンコウイセキ		
書名	民間信仰遺跡分布調査報告書		
副題	近世の經塚		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第192集		
著者名	田代 孝		
発行者	山梨県教育委員会		
編集機関	山梨県埋蔵文化センター		
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 055-266-3016		
印刷所	株式会社 峠南堂印刷所		
印刷日・発行日	平成13年3月23日 平成13年3月30日		
分布調査期間	平成10年9月1日～平成12年9月30日		
原間經塚遺跡	所在地	山梨県南巨摩郡南部町本郷329	
	25,000分の1 地名・位置・標高	南部	北緯35°17'43" 東経138°26'42" 標高181m
概要	主な時代	近世	
	主な遺構	經塚	
	主な遺物	一石經	
	特殊遺物	錢貨	
	特殊遺構	經塚石室	
	調査期間	平成11年2月26日～3月4日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第192集

民間信仰遺跡分布調査報告書 —近世の經塚—

印刷日 平成13年3月23日
 発行日 平成13年3月30日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会
 印刷 株式会社 峠南堂印刷所

